



新版
野菊の兵士

菊池寛



始



特233
307

野菊の兵士

菊池寛著



東寶書店版



目

次

嘘も美し……………三

わが子の結婚……………二九

男子の愛……………四五

母卑しからず……………六五

雷 雨……………八九

許 婚……………一〇三

嘘の効果……………一〇九

見合結婚是非……………一五九

勝利の後……………一八一

兩枝の花……………三三

戀愛休戦……………三四五

野菊の兵士……………三九五

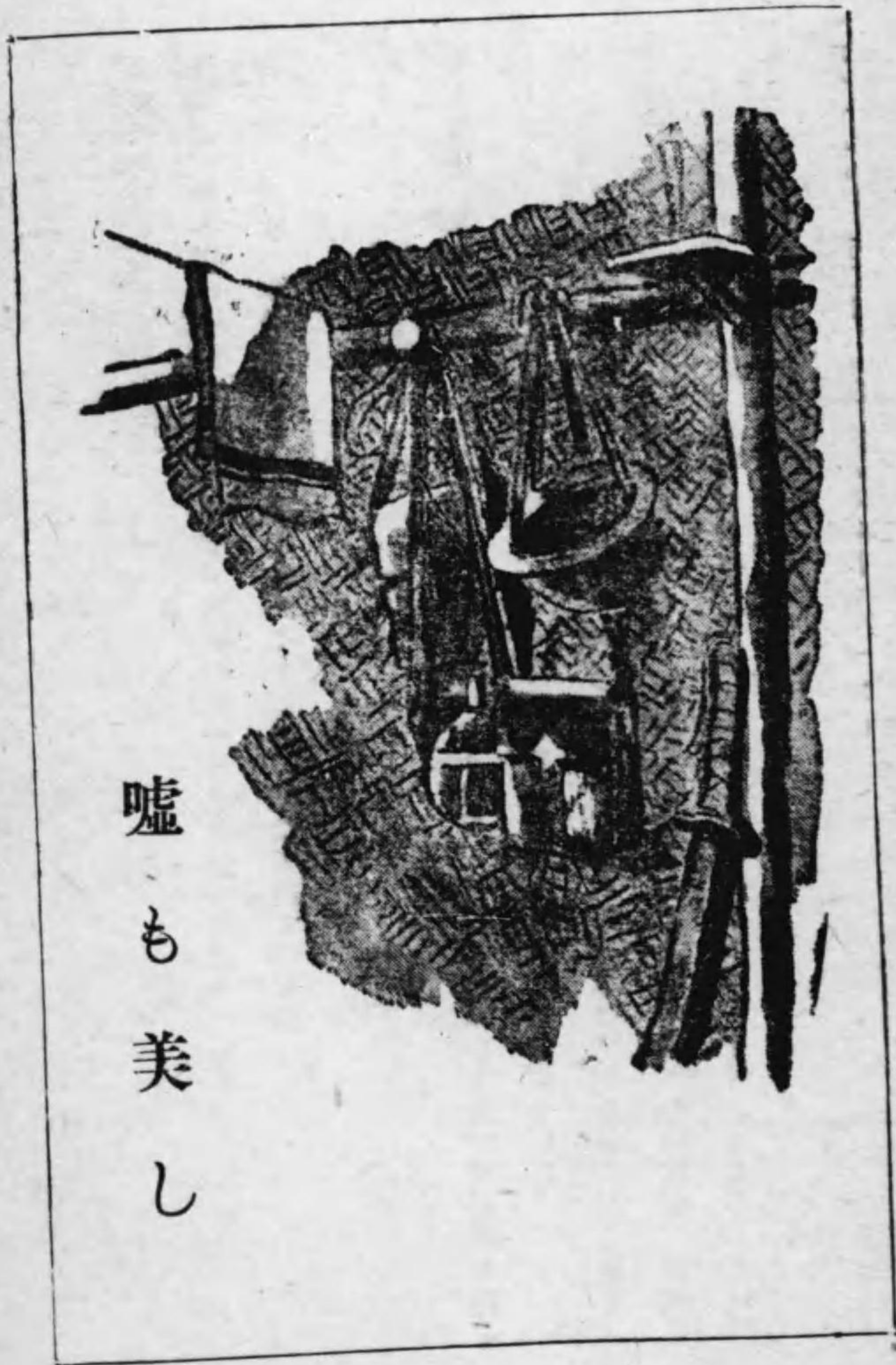
○

狐……………三二四

野菊の兵士
菊池寛

装幀・カット

小川真吉



嘘
も
美
し

眞夏の暑い日盛りであつた。

康子は、練兵場の隅の一本松の下で、三歳の伸一の手を引いて立つてゐた。

伸一は、此處へ来ると、もう工藤に會へるものと、知つてゐて、先刻から、

「パパ。パパ。」

と、しきりに騒いでゐる。

そんなに、父親に會ひたがつてゐながら、やはり子供で、其處らの草むらで、見なれぬ蟲を見付けると、しきりに母親の手を引き、只さへ大きな眼を、まん圓くして見つめる。

そんな時の生真面目な顔が、康子には工藤をつくりに思はれて、思はず抱きしめたくなる。

練兵場のやゝ兵舎に近い一角へは、何處かへ教練に行つてゐたらしい騎馬の一隊が、砂塵を上げて、雪崩のやうに、馳け歸つて来て、隊伍を整へると、隊長の訓示を聞いてゐるらしい。

「もう、直ぐ休み時間ですね。」

「さうでせう。貴方は、息子さんに御面會ですか。」

康子の傍にゐた商人風の男が、六十過ぎの小柄なお婆さんと話してゐる。

召集された息子、良人、兄、弟などに面會に来る人達は、幾度も来て、待ち合はしてゐる裡に、お互ひ同志顔馴染になる。そして、きまつたやうに、皆人のよい人達ばかりだつた。

やがて、休み時間になつたらしく、何の遮蔽物もない練兵場を横ぎつて三々五々、同じ軍装の人達が、肉親に會ふ悦びに、胸をはすませながら、此方へ向つてやつて来る。

同じ服装で、同じ軍人風の歩き方なのだが、康子には、顔のハッキリしない裡から、あれが工藤だなど、見分けられた。

「坊や、それパパちゃんよ、パパちゃんが、いらしたわよ。」

伸一を抱き上げて、指差すと、それとハッキリ見えたのか、それとも兵隊姿なら、誰でも父親に見えるのか、伸一は、

「キヤツ〜。」

と、喜んで母の胸の上で、手足をバタ〜させた。

「やあー 伸坊また来たのかー！」

若い少尉である工藤は、長身にピッタリ合つた凛々しい軍服で、康子には愛情をこめた視線

を興へながら、伸一を高々と抱き上げた。

「いつもの處へ行かう。」

工藤は、差し上げてゐた伸一を、右手に抱いて先に立つて歩き出した。

康子はうなづいて、いそぐと歩き出した。

歩きながら、工藤の顔を見て、康子はクツクツ笑つた。

「何がをかしいんだ……」

「だつて……」

と、康子は、暫く笑ひつゞけて、

「貴方は、お目にかゝる度に、黒くなるんですもの……」

「ハツハツ顔か、そんなに黒くなつた？」

「え、とても。チョコレート色なんて、通りこしてゐるわ……」

「さうか、ちや今に黒ん坊のやうになるかな。」

と云つて、二人は、聲を合せて笑つた。

鶴見の某重工業會社の製圖部へ勤めてゐて、室内ばかりに暮してゐた工藤は、體格の立派な

わりに、どちらかと云へば、色白であつたが、さうした變り方は、康子には頼もしかつた。

練兵場を廻つた所に、赤松の生えた小高い丘がある。

工藤は「團樂の丘」と云つて、康子が来るたびに、あまり人の居ない此の丘へ連れて来るの

だつた。

十坪ばかりの平たくなつたその丘の頂上には、緑濃い首蓆が柔い毛氈のやうに生えてゐ

る。

康子がお土産にもつて來たサンドキツチを喰べながら、工藤は筑波山の上に出た入道雲を指

さして、伸一に數を教へた。

「ほら、伸一。一つ二つ三つ、ね、云つて御覽！」

「うん。あれパパ、坊や、ママ。」

「ハツハ、ハ、ハ。さうか、あの雲が、パパとママと坊やか、待てよ。坊やが、一番大きいぞ。」

「うん……」

伸一は大きくうなづいた。

「うんか、坊やが一番大將か……」

まるで、ピクニックのやうに楽しい思ひで、一しよに笑はうとした康子は、ふと、この間中から、頭に在る問題——良人は、何時出征するか分らない今、工藤とは、まだ正式に結婚してゐない、工藤の母が、まだ二人の結婚を認めてくれてゐない——と云ふ事實に、ハタとぶつつかつて、何も知らないで、はしやいでゐる伸一の顔を見るにつけ、うつすらと涙さへ浮んで来た。

工藤の家は、相當な家柄であつた。

父は明治四十年代に京都府知事を最後に官界を引退して、貴族院議員に勅選されたが、大正十二年の大地震の直前に死んだ。

姉は、父の生前他へ嫁したが、一子を産むと、間もなく夭折した。

だから、工藤は母一人子一人であつた。

父は、清廉で、財を積む方ではなかつたので、財産は麴町中六番町の邸だけであつた。母は、その邸を賣り拂ひ、本郷彌生町に安い住宅を買ひ、残つた金のわづかな金利で健實に生活しながら、工藤の教育に専心した。

工藤は、頭は良かったが、少年時代身體が弱く、母は工藤を丈夫にするために、日夜、心を

碎いてゐた。

中學を卒業する頃から、身體も健康になり、一高から大學へと順調に進んで、數年前卒業したのである。会社には入つた年に入營し、幹部候補生となつて、成績がよく歩兵少尉になつたのである。

工藤のお嫁さんたるべき女性についても、母は多くの理想を持つてゐたのである。

(家柄もいゝし、當人も申分なし……)

と、思ふと、母親の頭には、父の知人である知名な階級の人々の令嬢達の顔が、常に浮んでゐた。

爵位のある人の娘でも、貰つて貰へないことはないが、それよりも相當な家柄で、多少の持參金でも持つて来る方が……息子が、申分ないのだから……どんな條件でも、無理でないやうな氣がして、母の夢は楽しかつた。

二

ところが、一昨年の春である。

ある晩、母と子が茶の間で、差し向ひになつて世間話をしてゐたとき、工藤はいきなり、「お母さん、僕、ある女の人と結婚させてほしいんだけど……」と、云ひ出したのである。

それ迄に、嫁の話などしても、笑つて、てんで受けつけなかつた工藤であつた丈に、母親は青天に霹靂を聴く思ひであつた。

母は、冗談にして相手にならなかつたが、息子は眞剣に話しつゞけた。

「その女はね、僕と同じ會社の女事務員をしてゐるんだけど、女性として素直で、やさしくていゝ人だと思ふんですが……」

「……………」

母は、息もつけぬほど驚いてゐた。

「それに、たいへん可哀な境遇で、家は茨城縣ですけど、お母さんが繼母で、ひどい仕打をするので、東京にゐる叔母さんが、引き取つて、女學校を卒業させたんですよ。苦勞をしてゐる丈に、主婦としても……」

息子が、まだ話しつゞけようとした時、母は、

「そんな女は、お母さんは御免ですよ。」

と、氣色ばんで云つた。

息子は、母の反對は豫て、豫期してゐたやうに少しも驚かず、

「お母さんは、職業婦人なんか、頭から嫌つていらつしやるけれど、中にはなか／＼人がゐるんですよ。その女なんか、お母さんが一度會つて下されば、きつと、好きになると思ふんですよ。」

と、しづかに云つた。

「人柄はともかく、そんな素情の分らない人を、貴君のお嫁には出来ませんよ。家の格もあるんですし、親類やお知り合の人達に對する面目もあるんですよ……」

と、母は云つたが、しかし息子の心が、相手の女に、すっかり傾いてゐるのを知ると、母は無性に悲しかつた。併し、今まで何一つ母に逆らつた事のない、息子である丈に、自分がハッキリ反對したら、きつとその女を思ひ切るだらうと、母は信じてゐた。

が、一月経ち二月経つても、息子はその女をあきらめる容子は見えなかつた。半年ばかり経つた頃、母の機嫌のよい折を見計つて、息子は再びその女の話始めて、今度

は川瀬康子と云ふ二十三になる女だと告げ、寫眞迄見せた。

寫眞で見る康子の顔は、職業婦人らしい冷たさや小利口さなどはなく、キリツとした顔立で眸の美しい顔だった。

工藤は、母が寫眞を見たら、康子に好意を持つてくれるだらうと思つてゐた。

しかし、彼の期待は見事にはづれた。母には康子の顔は、慎しくすましてはゐるが、そんな尤もらしい顔をして、自分達母子を、だまさうとする女のやうに見えた。

母の反対は、少しも緩和されなかつた。

が、母の反対にも拘はらず、二人の間は加速度的に進んだ。

また、半年経つた。工藤は、母の前で、もう康子と事実上の夫婦になり、康子は妊娠したから、どうかこの結婚を許してくれと哀願した。

それを聴くと、母は眞赤になつてヒステリックに叫んだ。

「そんな自堕落な女のこととは、今後絶対に話をしないでくれ。その女と夫婦になりたいのなら、お前が家を出て行つて下さい。お母さんは、結構獨りで暮して行きますから。」

良人に別れた後、十幾年を、人生に於けるたつた一つの望みの灯として、心身を傾け盡くし

て育てた愛兒を、康子のために、滅茶苦茶にされたと思つた。

工藤の依頼で、自分の弟である銀行家の望月信吉が、説服に来た時も、却つて叱りつけて歸した。

康子の叔母の方は、工藤をすつかり信用して、工藤の母親が許してくれる迄は、康子を預りませうと云つてくれた。

康子は、會社をよして、叔母の家で、赤ん坊を生んだ。

それが、伸一である。

當人同志の間では、立派な正しい夫婦でありながら、公然と同棲することは出来ないでゐた。

三

工藤が、召集されると、日曜、祭日は勿論、出来る丈暇を見つけて、郊外電車で二時間ばかりかゝる工藤の所屬部隊へ、伸一を連れて會ひに行つた。

それも、工藤の母が面會に来る時には、康子の方で遠慮してゐた。

秋になると、工藤は出征した。

×驛で、勇士を見送る歡呼の聲の後で、康子は寂しく伸一を抱いて立つてゐた。

伸一は小さい日の丸の紙旗を、おぼつかない手で振りながら、

「パパ、パパ。」

と、小さい聲で叫んでゐる。

すると、何うして見つけたのか、工藤が群衆を掻き別けて、康子の所へ來た。

喜んで躍り上る伸一を抱き上げて、康子の顔をじつと見つめながら、

「行つて來る。お前達の事は、望月の叔父さんが引き受けてくれた。安心してゐてくれ……」

「さうー」

康子は、涙ぐみながら肯いた。

が、すぐ萬歳の聲が激しくなり、工藤は群衆をかき別けて、汽車に乗つたが、もうそれぎり

工藤の姿は見えなかつた。

人々の流に押されながら、出口の方へ歩いてゐると、

「伸坊ー 伸坊ー」

と、太い男の聲がした。振り返ると、工藤の叔父の望月が、手を振りながら、近づいて來た。

康子が挨拶すると、

「何處にゐたんだ。お前さん達は、工藤に會へたかい。」

「はう。」

「それはよかつた！ 俺は、工藤のお母さんと一しよに來たのだが、何うしても見つからなかつた。さうさう、お母さんが、お前さん達に、會ひたがつてゐるんだよ……」

「えつー」

思ひがけない言葉に、康子は眼を刮つた。

「あの頑固婆さんも、息子の出征で、氣が折れて孫の顔を見たいんだよ。一つ會つて下さい。會つた方が、萬事うまく行くと思ふ……」

と、さう云ひながら、望月は伸一を抱きながら、先きに立つて歩いた。

改札口を出ると、望月の待たしてあつた車の中に、工藤の母は、既に乗つてゐた。

勿論染めて居るのであらうが、豊かな黒髪が、房々としてゐて、皺も寄つてゐず、工藤から

聞いて知つてゐる年には、何うしても見えなかつた。

康子が、何と挨拶していいのかと、自動車の外で、モチモチしてゐると、

「まア、まア、挨拶は後にして、乗つた〜」

と、云ふ氣さくな望月にせき立てられて、康子は目禮して、補助席に腰を下した。

伸一は、工藤の母と望月との真中に腰をかけたが、自動車に乗つたのが、嬉しいらしく、手を叩いたり旗を振つたり、してゐた。

工藤の母は、それを冷かに見てゐる丈であつた。

京橋近くの、静かな日本料理の家に上ると、工藤の母は、女中に案内されるまゝに、黙つて

白百合の生けてある床を背にして、坐つた。

康子が、敷居をは入つて、伸一と並んで坐り、両手をつき、

「始めまして、私……」

と、云ひかけると、工藤の母は、

「貴女の事は、よく知つて居ります。」

と、ピシヤリと叩くやうに云つた。

望月は、その氣まづさを、拂ひのけるやうに、

「伸坊！ 大きくなつたなア、もう大分お話が出来るだらう。お前もパンザーイつて、云つた

か……」

と、伸一に話しかけた。

しかし、伸一は、自動車から降りて、初て見馴れない二人の大人に氣がついたやうに、笑はうともせず、不思議さうに、眼を刮つてゐた。

練兵場で見馴れない虫を見つけた時と、同じやうな顔である。

「此の顔、此の顔！ ねえ姉さん、この伸坊の顔は全く工藤家の顔ですよ。お祖父さんとよく似てゐるぢやありませんか。」

と、工藤の母の注意をうながすやうに云つた。

が、工藤の母は、何も答へず、作法通に、茶碗を口へ持つて行つた。

やがて、お膳が運ばれたが、工藤の母は、康子に對し、一言も口を利かうとしなかつた。

工藤の別れ際の言葉と云ひ、望月が自分達を連れ來た態度と云ひ、工藤の母が、自分達の事を許してくれるのかと、期待してゐた丈に、工藤の母の冷然たる態度は、康子に取つて、身を

切られるやうに、悲しかつた。

せめて、伸一にだけでも、言葉をかけてくれないかと思つた。

工藤の母は、むつとり黙つたまゝで、どんな堅いものでも、ガリ／＼噛んで喰べてゐた。その齒の音を聽いてゐると、康子はこのお母さんでは、容易に許してくれさうもない氣がした。

伸一は、初は遠慮がちであつたが、だん／＼馴れて来て、好きなものは、母の膳のを喰べてしまつた後、望月の膳にあるのまで、ほしいとねだり出した。

「いけません！ それは。」

と、康子が叱ると、伸一はそつくり返つて泣いた。

康子は、顔があつくなる思ひであつた。すると、じつと見てゐた工藤の母が、

「子供は、わがまゝに育てると、ロクなものにはなりませんよ」と、云つた。

「……………」

康子は、顔が上げられなかつた。

「義伸なども、わがまゝに育てたのが、いけなかつたのです。」

と、云つた。義伸と云ふのは、工藤の名前であつた。わが儘に育てた爲に、康子などとしよになつたのだと云ふ非難であつた。

康子は、胸を突かれる思ひであつた。

「貴女の叔母さんのお家は、何をして居られますか。」

「はい。商賣をして居ります。」

「何の御商賣？」

「……………」

喫茶店などと云はうものなら、どんな侮辱を受けるかも知れないと思ふと、康子は口がきけなかつた。

「とにかく、坊やだけ、私の家でお預りませう。私が、大事に育てあげますから……」

と、工藤の母は、ハツキリと宣言した。

康子は、サツと全身の血が抜けるやうな氣がした。

工藤の母が、その家から、先きに歸つた後、康子は伸一だけを手離すのは、嫌だと云つて、云ひ張つたが、望月は、

「まあ、わしに委しときなさい。子供を引き取ると云ふことは、つまり貴女も引き取る事です。貴女も引き取らなければ、子供は私生兒になりますからね。家柄を自慢にするあのお母さんが、私生兒にするわけはありませんよ。一度に、貴女まで引き取ると、親の威厳に拘はると思つてゐるのですよ。子供を引き取ると云ふ事は、お母さんとしては、たいへんな妥協です。子供を引き取ることは、工藤家に入籍させるため、子供を入籍させると云ふことは、貴女を入籍させる事ですから……」

と、云つた。

望月の言葉も、道理だと考へられたし、子供だけでも、引き取られたと聞いたら戦地にある工藤が、どんなに喜ぶだらうかと思つたので、康子は涙を吞んで承諾した。三日ばかり経つた晩秋のやゝ冷たい日の朝、康子は決心して、本郷の工藤家へ伸一を連れて行つた。

工藤の母は、姿を見せず、新しい乳母として傭はれたと云ふ四十近い、やさしさうな女が、

伸一を受け取つた。

康子は、伸一の食べ物の事や、風呂に入れる注意のこと、便が出るとき、どんなにして知らせるかなどと、細々とした事を、その乳母に傳へて、心残りながら、伸一が玩具の汽車で、遊んでゐる間に、そつと逃げるやうに歸つて來た。

五

伸一を手離した當座、康子は身の置き處もないやうな悲しみに、悶えてゐた。

あまりに堪へられない時は、本郷の工藤の家の近所を、もしや乳母に連れられて散歩に出る所にも會ひはしないかと、さまよつた事もあつた。

伸一を本郷へ連れて行つて間もなく、工藤の叔父の望月から、當座の小遣と云ふ名目で、百圓丈送つてくれたぎりで、工藤家からは、その後何とも云つて來なかつた。

二月經ち三月經つた。

ある夕方、康子が狭い叔母の家で、夕飯の支度をしてゐると、

「へい、軍事郵便！」

と、店で使つてゐるボーイが、端書を持つて来てくれた。
鉛筆で走り書してあるが、戦地からよこした工藤の第一信であつた。
胸が一杯になつて、暫くはじつと眼をつむつてゐたが、やつと裏を返して讀んだ。

伸坊へ。

元気かい、風邪など引かないだらうね。相變らず、駄々をこねて、ママをこまらしてゐるのかね。パパの居る所は、とても寒いよ。じつと立つてゐると、直ぐ靴が凍りさうだ。でも、パパは元気だから、安心してくれ。望月の叔父さんに頼んで置いたが、もう本郷のおばあさんに會つたかしら。パパは、昨夜おばあさんと、ママと伸坊とが、三人で仲よく食事をしてゐる夢を見たよ。パパも、たべたいと思つてゐる裡に、夢がさめちやつた。

讀めない伸一に宛てある丈に、却つて康子の受けた感じは、大きかつた。自分達母子と、工藤家の調和を、こんなにまで心配してゐてくれるのかと思ふと、康子は胸が痛む思ひがした。

康子は、すぐ返事を書いたが、何うしても、伸一と自分とが、引き離されてゐる事を、書く

ことが出来ず、自分の事には一切觸れない事にした。

パパちゃんのお夢の通、坊やは本郷のおばあちゃんの家へ来て、パパちゃんの古い御本を引つくり返して遊んで居ります。

と云ふ風に、伸一が工藤の家にあることを書いて出した。

一月経たない内に、工藤からの返事が来た。

今度は、康子宛であつた。

手紙見た。伸一が、本郷の家に引き取られたとあるが事實か、貴女は何うなのか。貴女も本郷の家に引き取られてゐるのなら、こんな嬉しいことはない。母は、頑固だが、根はいゝ人なのだから、貴女によさも、すぐ分つて貰へると思ふ。貴女と伸一とが工藤家に入籍出来たら、僕は安心して國のために、働らけると思ふ。しかし、貴女の手紙の消印が大森なので、貴女一人は、まだ大森に居るやうな氣もするのだ。至急、精しい返事をくれ。

康子は、工藤の愛情が、心の中にしみ入るやうな気がした。その工藤に、事實と反對の事を書くのは、悲しかったが、戦線に立つ工藤を苦しませることを思ふと、本當のことはどうしても書けなかつた。

何度も書きかけては破り、破つては新しく書き直したが、結局、工藤が前にしたやうに、伸一から父宛の手紙で、書いた方が、かき易いやうな気がした。

パパちゃん。

ママも坊やと一しよに、おばあちゃんのお家にゐます。

坊やは、おばあちゃんが大好きです。ママも、おばあちゃんは、とてもいゝ方だと喜んで居ります。

昨日は、お天気がよく、もう春が来たやうであつたので、おばあちゃんもママと坊やとで、動物園へ行つたの。

坊やは、お獅子や象を見て、たいへん嬉しかった。

お家へ歸ると、ママ宛のパパのお手紙が、大森から、廻つて来てゐたの。

坊や達のことはちつとも心配なさらなくて、お國のために、働いて下さいと、ママが云つて居ります。そして、お元氣なお手紙頂戴。ハイチャ。

康子は、書いてゐる内に、自分では泣いてゐた。

それに對する工藤の返事は來なかつた。

三月下旬の、例年になく遅い雪が、一晚中降つた翌日の朝だつた。康子の叔母の家の前の狭い路に、ハイヤーらしい綺麗な自動車が停まつた。店先にゐた康子が、驚いて眼を刮ると、望月が一番に自動車から降りた。その後、伸一を降してゐる工藤の母の姿が見えた。

康子は、電流のやうなものを感じた。

「おゝ康子さん！」

望月の顔が、蒼白く緊張してゐた。

「工藤が、何うかしましたの？」

康子は、ハツとして云つた。

「うん、戦死したよ。」

それを聞いた時、康子は取り亂しはしなかつた。手に持つてゐた筆を、突いたまゝ、じつと床に目を落したまゝだつた。その腰の所へ、伸一が走り寄つて、取りすがつた。

工藤の母は、ハンカチで、眼を掩うたまゝ、康子の前へ、じつと頭を下げた。

「お母さんは、出征前に、ちゃんと入籍させるのだつたと心から後悔していらつしやる。しかし、貴女が、立派な手紙を出して下さつたので、工藤を安心させることが出来たと云つて、大變感謝していらつしやる！これを御覽なさい。」

と云つて、望月は、工藤から母宛の手紙を見せた。

お母さん有難う。

康子の手紙で、康子も伸一もお母さんのお膝許に引き取られたとの事で、僕こんな嬉しいこととはありません。僕は今こそ、何一つ心残りなく、國のために働けます。いよく明日から〇〇方面の總攻撃が始まります……僕は、今元氣一杯です……。

それを讀み了つた康子は、わーと聲を立て、泣き崩れた。

工藤の母は、もう先刻から、店の椅子に崩れるやうに坐つて泣いてゐた。父の死を知らぬ伸一が、

「おばあちゃん、泣いちや、いやー！」

と、云ふと今度は久しぶりに會つた母の所へ来て、

「ママちゃんも、泣いちや、いやー！」

と、慰めてゐた。

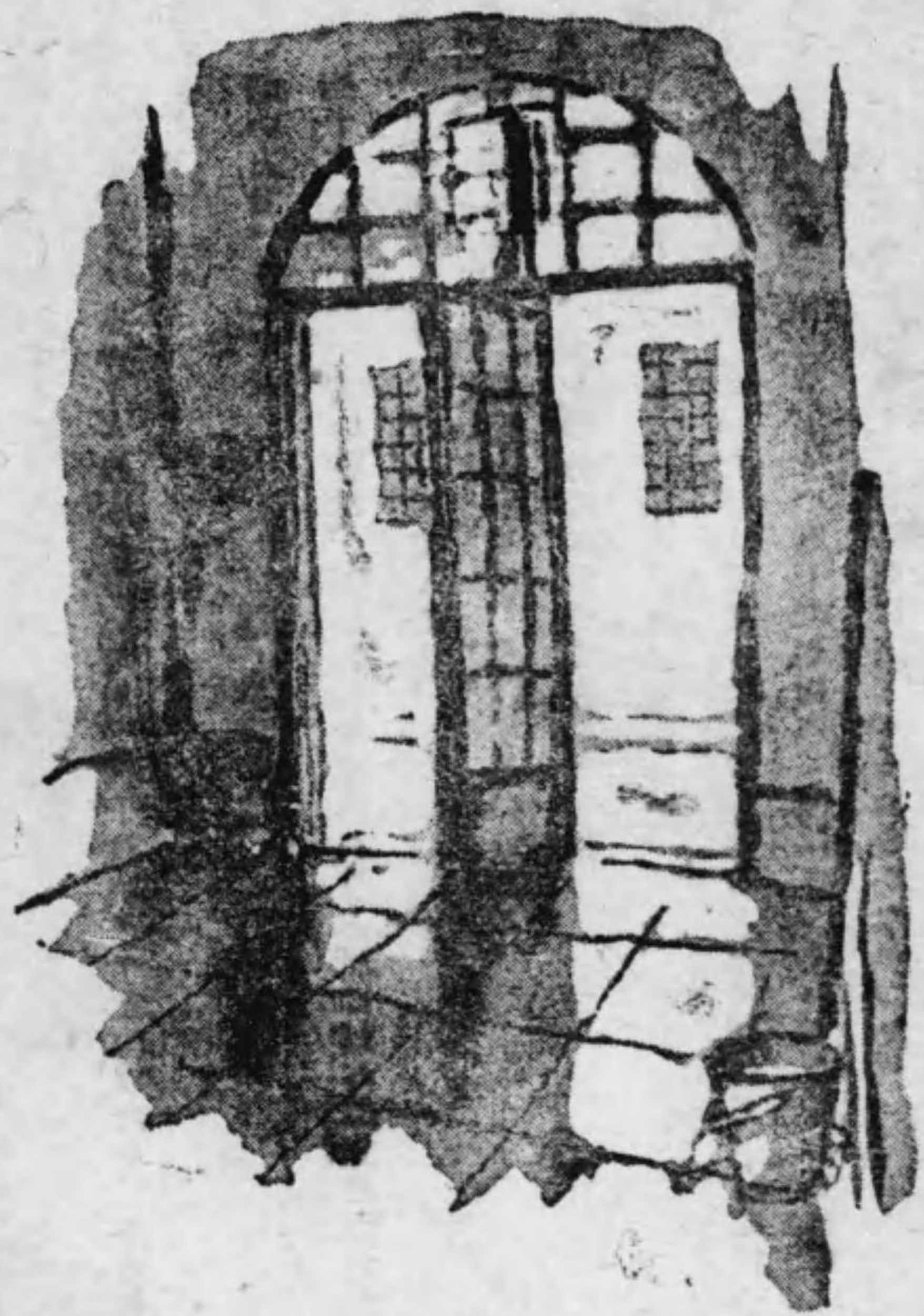
望月は、康子の肩に手を置きながら云つた。

「お母さんは、かう云はれるのだ。今までの自分の間違を何うか許して貰ひたい。そして、工藤の代りに康子さんに、本當の子供になつて貰ひたい。そして、伸一と三人で、仲よく暮して行かう。工藤が、戦死する時、さう信じてゐたのだから、その通りするのが、あれに對する何よりの追善だと、かう云はれるのだ。貴女も、それに異存はないでせう。」

「……………」

泣きながら、康子は幾度もうなづいた。

わが子の結婚



丸の内にある帝都ビルにも、掃除婦が七人ばかりゐた。ビル内の会社や事務所が、五時頃に退けた後、各部屋を廻つて掃除するのである。

扉の把手を磨いたり、リノリユームの床を掃いたり、椅子にハタキをかけた後、各室を掃除して歩くのである。

彼等は、年の若い方で、三十五六で、五十に近い老婆が多かつた。

瀧山レンも、四十六であつた。若い時は、美しかつたであらうと思はれる顔立だつたが、もう頬の肉が落ち、見るかげもなく、凋び果てゐる。

いつも、三人宛一組になつて、分擔を定めて、掃除するのである。

その日は、五階と六階とが、レンの分擔になつてゐた。

五階から始めて、六階に廻つた頃は、もう六時に近かつた。

五階も六階も、同じ間取りで、エレヅエーターの乗降口から右と左に別れて、右に行つた方は右に、左は左に折れて廊下があり、その廊下の両側に、部屋がつゞいてゐるのである。

小さいビルディングなので、部屋の数は、各階とも十五六しかなかつた。

会社の支店や何々協會の事務所が多かつたが、その支店や事務所の性質に依つて、いつも掃

除をする必要のないほど、整頓されてゐる所や、給仕達は何をしてゐるのだらうと、恨まれるほど、取りちらかしてゐる事務所などもあつた。

しかし、掃除婦達は、人生のあらゆる辛酸を経て来た女が多い丈に、何の不平も云はず、椅子を片づけたり、机の上の書類を整理したり、黙々として働くのだつた。

「おや、新しい会社が引越して来たんだね。」

この四五日空いてゐた右側の廊下の三番目の部屋の前に、立ち止まつた一番若い掃除婦の工藤ヨシが、呟いた。

工藤が、その把手を磨いてゐる曇り硝子の扉に金文字で、箕山商事事務所と書いてある。

「え、箕山商事！」

と、レンは、工藤に寄り添つて、その扉の金文字を見たとき、ハツと足が竦むやうな気がした。

それは、彼女にとつて、忘れきれない懐かしい名前であつた。

彼女の四十六の一生は、普通の女性の一生に比べて、ずいつと淋しく苦しいものだつた。ただ、十八から十九にかけての二年間だけ、彼女はどこか別世界にでも住んでゐたやうな楽しい

思出がある。

彼女は、十八の年の三月に、その頃四谷にゐた箕山と云ふ實業家の家に、上女中に傭はれた。そして、その家の長男である進一と云ふ二十三になる息子と戀愛した。進一は、少し不良に近い學生であつた。そして、レンを弄ぶと云つてもいゝやうなやり方で、レンと關係した。が、貧しい家に育つてゐたレンには、相手が後光でも射してゐるやうに貴く思はれ、少女らしい純情の凡てを捧げて、相手を愛した。そして、間もなく妊娠してしまつた。

レンの妊娠が知れると、進一の母は驚いて、レンを家から遠ざけたが、生れた子を里子にするに云つたやうな無慈悲な事は、しなかつた。子供は、箕山家で引き取つて、進一の父の子として、入籍させてくれたし、レンにも手切金としての意味で、三千圓ばかり金を出してくれた。

レンもレンの父母も、箕山家の處置に對して、心から感謝してゐた。レンは、身分違ひの相手だと、初からあきらめてゐたので、引き離されることを、ちつとも恨んでゐなかつた。自分の産んだ子と、引き離されることは悲しかつたが、しかし豊かな家に引き取られて、大事に育てられることを考へると、レンは子供のために幸福だと思つた。

さうした跡始末がついた後、進一は永久に、レンの前には現はれなかつた。しかし、レンにとつて進一は、永久に忘れられない戀人だつた。

レンの父母は、箕山家から貰つた三千圓の金で、新宿で、雜貨商を開店した。そして、ある程度の成功をした。が、一人娘のレンに貰つた婚養子が、道樂者で、店を滅茶苦茶にした後、三十六と云ふ若さで死んでしまつた。レンの父母も、その前後に死んだ。レンは、三人の子供をかゝへて、三十一の年から十五年、どうにか暮して來たのである。

長男は二十三になつて、職工になつてゐた。長女は、會社の女事務員になつてゐる。だから食ふことに心配はなかつた。たゞ、次男を商業學校にやつてあるので、その學費を稼ぐために、レンはかうして掃除婦になつてゐるのである。

だから、箕山商事事務所と云ふ金文字を見たとき、年にも似合はず、胸がさわいだのである。

が、進一が關係してゐるわけはなかつた。進一は、もう五六年前に、死んでゐる筈である。工藤ヨシは、把手を磨いてしまふと、扉を開けて中へは入つた。瀧山レンも、老いた胸をときめかしながら、つゞいては入つた。

その部屋は、六階では可なり大きい部屋だつた。内部が、事務室と應接室と重役室の三つに劃られてゐた。

事務室には、まだ社員が二、三人残つてゐた。

レン達は、應接室を掃除し、社員に斷つてから、事務室を掃除した。それから、重役室の掃除にかゝらうとすると、社員が、

「そちらは、いゝですよ。まだ、社長が居られますから。」と、云つた。

その社員は、二十一、二ばかりの、色の白い物やはらかな給仕上りらしい少年だつた。

レンは、訊いた。

「箕山さんつて、四谷にお屋敷のある箕山さん？」

「さうですよ。」

社員は、氣がるに答へてくれた。

「先代の方は、亡くなられたんですね。」

「あゝさう。」

「ぢや、今の旦那様は、お若いんでせう。」

「さう……」

レンは、急に心はずんだ。レンは、自分の息子が、箕山家の跡取りになつてゐるかも知れぬ事を知つてゐた。名前は、健一と云つた筈である。

「健一様と、おつしやるんでせう。」

「さう。お婆さんよく知つてゐるね。」

さう云ふと、社員は交換手の居なくなつた交換臺にかゝつて來てゐる電話を見つけ、その方へ走しつて行つた。

レンは、自分の生んだ子を一目見たいと思つたが、今日に限つたことではないと思つたのでその部屋を出て、隣の信州木材會社の東京支店の掃除にかゝつた。

しかし、レンは、急に自分の生活が、明るくなつたやうに楽しかつた。

とにかく、自分の生んだ子供が、大家の跡取りになり、この世の中で、幸福な豊かな、生きがひのある生活を送つてゐてくれると云ふことは、自分まで生き甲斐のあつたやうな氣がして來た。

レンは、その日から、掃除婦の生活が、今までよりは、ずっと楽しい意義のあるものに考へられて来た。一階と二階、三階と四階、五階と六階、七階と八階と、五日目毎に、五階と六階の掃除が廻つて来るのであつたが、その日だけは、帝都ビルへ出勤するのが、小學校時代に遠足にでも行く朝のやうに、心が躍るのであつた。

が、五六回、箕山事務所の掃除をしたが、レンは一回も若い社長に會ふことが出来なかつた。が、重役室の卓子の片づけたり、椅子の上の革製のクッションに觸つて見たり、社長の筆蹟であるらしい書類を見たりすることが、レンにはこの上もない楽しみであつた。

時には、社長の椅子に、そつと腰かけて見た。仲間の工藤ヨシが、レンをからかつた。

「あなたは、この部屋に來ると、何うしていき／＼してゐるの。」

「何うつて事もないが、あんまりお部屋が、キチンとしてゐるので、氣持がい／＼からだよ。」

「さうかね。こゝの社長さんは、若いと見えて、置いてある品物がハイカラだね。」

と、工藤ヨシは、レンの氣持をそれ以上は、疑はなかつた。

箕山事務所が、移轉して來てから、三月ばかり経つた日の事である。

レン達が入つて見ると、十五六の給仕が居るだけで、社員は誰もゐなかつた。應接室を片

づけて掃除をした後、レンは何氣なく重役室の扉を開けた。

開けた瞬間、レンはハツと眼を見はつた。机と反對の壁際に置いてある革張りのソファに、

二十七八の青年紳士と、二十一、二ばかりの美しい洋装の令嬢とが、身體をすれ／＼に寄せながら、坐つてゐたからである。

青年紳士は、不意に扉を開けられたのに、ビックリしたらしく、

「誰だ！ 失禮ぢやないか。」

と、怒鳴つた。

「ビルの掃除婦でございます。」

と、オロ／＼しながら云つた。

青年紳士は、自分が聲を荒げたのを耻ぢるやうに、

「さうか。それは、失禮。今日は、掃除はい／＼よ。」

と、物やはらかに云つてくれた。

レンは、扉を閉めながらも、嬉し涙のやうなものが、こみ上げて來るのを感じた。

青年は、進一そつくりの顔をしてゐたが、口元だけは、自分の長男に似てゐるやうな氣がし

た。

レンは、初めてわが兒に、言葉をかけられたのが、この上もなく、うれしかった。それから、五日経つて、六階の箕山事務所に掃除に行つたとき、レンと時々話したことのある少年の社員が、まだ残つてゐた。

レンは、その社員に訊ねた。

「今日は、社長さんは、いらつしやらないの？」

「今日は、見えない。ゴルフだらう……」

「まあ、ゴルフのときは、會社をお休みになるの……」

「うん。」

「この間、社長さんのお部屋へは入らうと思つて、扉を開けると、若いキレイなお嬢さんが来て、話していらしたよ。」

と、レンが云つた。

「うん。あれか、あれは山崎子爵の令嬢だ！」

「まあ、華族様の……」

「華族でも、貧乏華族だらう。」

「貧乏だつて、華族ならたいしたものだよ。」

「社長も、そんな氣持だらう。だから、あのお嬢さんと、結婚するんだよ。」

「まあ、さう……何時？」

「來月の八日らしい。」

「まあ、おめでたいわねえ……」

レンは、わが事のやうに嬉しかった。

それなら、あの時、相手のお嬢さんの顔をもつと、よく見るのであつたと思つた。その次ぎの掃除日だつた。

レンが、箕山事務所へは入つて行くと、まだ社員は、二三人残つてゐた。重役室にも、人の氣配がした。應接室も、事務室も、掃除をすましたが、レンは重役室に、未練があつた。もう少し、待つてゐたら、若い社長の歸り際の姿でも、一目見ることが出来るやうな氣がした。

レンは、雑巾バケツを手に提げながら、重役室の扉の前に、ボンヤリ立つてゐた。すると、中からなつかしいわが兒の聲が聞えて來た。話し相手は、いつかの令嬢であるらし

かつた。レンは、恍惚とした氣持になり、つい扉に寄り添つて、中から洩れる聲に聞きほれてゐた。

と、急に、部屋の中に、人の立ち上る氣配がしたので、レンはあわて、身を避けようとしたが、重いバケツを手にしてゐたので、身體の自由が利かず、内から開かれた扉の端が、バケツに突き當ると、レンは、思はずバケツの手を放した。その中に八分通り溢へてあつた汚水が中から出て來た令嬢の美しい訪問着の裾から、まぶしいほど白い足袋に、とびかゝつた。

「あつー」

と、レンが聲を立てると、令嬢も、

「まあー だいへんだわー」

と、驚きの聲を出した。

「何うしたんです。」

若い社長は、驚いて飛び出して來た。

レンは、蒼白になり、汚水の流れてゐるリノリユームの床に、膝をつくつと、

「申譯ございません！」

と、云つた。

「さうだよ。私が、わるいのよ、そんな所へ坐つたら、着物がよごれるわよ。」

さう云ふと、令嬢はレンの手を取るやうにして、引き起してくれた。

「何うしたの。貴女が開けた扉が、バケツにぶつつかつたの……」

と、若い社長が云つた。

「さうなの、私が、亂暴にあけたからよ。御免なさい、お婆さん。」

「さうえ。私がボンヤリしてゐたからでございます。」

レンは、また床の上に、うづくまりさうにした。

「いゝよ。お婆さん、お互に、災難だよ。」

さう云ふと、若い社長は、ハンカチを取り出して、令嬢の足袋を拭かうとした。

「勿體ない。私がするわ。」

と云ふと、令嬢は、再び部屋の中へは入り、社長もそれにつゞいて部屋へは入らうとしながら、レンをふり返つて、

「さうよ。心配しなくつても。」

と、云つてくれた。

レンは、思ひもかけず、自分の息子と、その妻になる女とから、やさしい言葉をかけられ、これで一生涯思ひ残すことがないやうな気がした。

箕山健一は、結婚式の前々日出社した。結婚をすると、一週間近く新婚旅行へ出るの、その間の事務を指令して置く用事があつた。

出社して、机の上を見ると、書類の上に（お祝ひ）と、書いた紙包が置いてあつた。開けて見ると、麻ではあるが上等ではないハンカチが、三枚は入つてゐた。

贈り主の名前は、どこにも書いてなかつた。

しかし、この乏しい贈物が、健一には却つてほゝゑましかつた。きつと、事務所の女事務員か交換手でもくれたのだらうと思つた。

彼は、給仕の少年を呼んで云つた。

「おい！ これを誰がくれたのか調べてくれー」

給仕は、すぐ出て行つて、社員に訊ねて廻つたらしかつたが、すぐ歸つて来て云つた。

「誰も、心當りがないさうです。」

「さうかな。誰がくれたんだらう。この部屋に、は入つて来るものは、社員以外にはない筈だが……」

「皆に、訊きましたが、お祝は、皆で金を出し合つて花瓶を差しあげたので、個人でさし上げる人はない筈だと云つて居ます。」

「それも、さうだね。ちや、誰がくれたんだらう。」

「さうですね。」

少年給仕も、首をひねつてゐた。

健一は、掃除婦の事などは、夢にも考へなかつた。

しかし、この無名の贈物は、何か氣に入つた。誰か、この世の中で、陰ながら、自分の幸福を祈つてくれる人が居ると云ふことは、うれしい事だつた。

彼は、そのハンカチを元の紙につゝみ、左のポケットに入れた。

少し品物は、悪いが、贈り主の好意を無にせず、新婚旅行中の使ひ料にしようと思つた。

愛の子男



よく晴れてゐて、既に初夏を思はせるやうな四月半の午後、美知子は、何年振かで、日本髪に結つてゐる母と並んで、街を歩いてゐたが、ふと自分が二日ばかりで、人妻になる身だと考へると、身内に、つんと甘しいやうな哀しみが、湧き上つて來た。

美知子の父は、相當の資産を持つてゐたが、此處十年ばかり、手を出したあらゆる事業が失敗して、今では破産に瀕してゐた。

事業の思ひ付は、非常によいのだが、いつもやり方が杜撰であるために、途中で破綻して、物になつた例がないのであつた。

殊に、三、四年前に、アパートの流行に連れて、なけなしの資産の全部を投じ、住んでゐる家まで抵當にして、青山の墓地近くに建てたアパートが、最初の一年ばかりはよかつたが、近所に設備の完成したコンクリート建の堂々たるものが立つたため、お客が眼に見えて激減し、持ち切れなくなつて手離した時は、投じた金額の半分にも賣れなかつた。そして、二三萬圓の借債が残つた。

それ以來、美知子の家の窮状は、月々に激しくなつた。その上、父が輕微ではあるが、腦溢血を起して、起居が不自由になつた。

父と母と美知子と弟との四人暮しの家庭には、この一年ばかり、不安な日がつづいた。たゞ、父は勝気で、華美な性質である丈に、美知子などには、出来る丈、不自由をさせまいと、努力してゐるのだが、それが美知子に取つて、なほ心苦しかつた。

美知子の父母に取つて、家運を挽回する希望が、たゞ一つだけ残つてゐた。それは、美知子の世にも稀な美貌であつた。

十六七の頃から、その氣品のある美しさは、學校でも町内でも評判であつた。

美知子は、素直な氣弱な性格であつたが、容貌は、その性格とは反對に、美しさの中に、犯しがたい氣品を含んで、一眼見た人々は、高貴な名門の令嬢と、速断してしまふほどであつた。

一昨年女學校を卒業して以來、縁談は十指に餘るほどだつたが、父はその縁談に中途まで耳を傾けても、ある點まで來ると、首を横に振つてしまつた。彼は、口では露骨には云はなかつたが、娘の支度金として、家の借財を返し得る位の金額がほしかつたのである。

素直で、結婚以來、父の云ふ通になつて來た美知子の母は、父のやり方に對して、一言も云はなかつた。

美知子も、自分の運命をあきらめてゐた。女學校の五年時代、彼女はお友達の家で紹介された粕谷と云ふ一高の學生と、少女らしく清純な甘やかな交渉を半年位續けてゐた。二人とも、口ではハツキリとは誓はなかつたが、將來結婚してもいゝと思つてゐた。が、相手が京都の帝大へ入學すると同時に、美知子の家の破綻が起り、美知子の結婚に對する父の考へが、露骨に判つたので、美知子は心の中で、粕谷の事は、泣いてあきらめてゐた。

粕谷からの手紙に對しても、三度に一度が、五度に一度になり、おしまひには、返事を出さなくなつた。それとなく、相手に思ひ切らせるやうに、賢くも振舞つて來たのである。

だから、美知子は、心に染んでも染まなくつても、一家の窮狀を救ふために、父の欲する通りの結婚をするつもりでゐた。

今度の縁談の始まりも、美知子が生花のお稽古に行つた先で、見染められたのである。相手は、南洋貿易の成功者で、資産は數百萬圓に上ると云はれてゐた。二十二の年から南洋

に渡つて、奮闘してゐたため、今年三十五になるまで、獨身をつゞけてゐたと云ふ立志傳中の人物であつた。

二十一になる美知子は、年が可なり違ひ過ぎてゐるが、しかしこの程度の違ひは、辛抱出來ないほどの違ひではなかつた。

生花の師匠を通じての申込であつたが、この話を聞くと、父は最初から、飛びついてしまつた。

支度料として、二萬圓出した上、美知子の家の負債の整理にも盡力すると云ふのであつた。

たゞ、相手が、お花の師匠に、

「新橋で、氣の利いた妓を受け出すにも、四五萬圓いると云ふぢやないか。素人の立派なお嬢さまを貰ふんだもの、倍でも三倍でも出してもいゝ。」

と、豪語したことが、何時しか美知子の耳にも、は入つたことが、とても厭だつた。戀愛スキの結婚であるにしろ、美しい人形扱ひにされなくなかつた。やはり、一人の女性として、愛して貰ひたかつた。

その上、見合の時の一象も、美知子に取つては、嬉しいものではなかつた。

相手は、五尺七八寸もあらうと云ふ偉丈夫で、岩のやうに美知子の前に坐つてゐた。それはそれでよかつたのであるが、自分を見染めたと云ふ仲人の云ひ分とは、まるでそぐはぬやうに相手はニコリともしなかつた。情の剛さうな唇元を、しつかりと結んだまゝ、仲人にも、美知子に附添つて行つた母親にも、あまり口を利かなかつた。

美知子にも、直接には言葉をかけなかつた。

が、美知子が家に歸ると、生花の師匠が、すぐ自動車で駆けつけて来て、美知子の承諾を得ると、大喜びで、歸つて行つた。

それからの手続きは、扇をたゞみ込むやうに、バタ／＼と定まつてしまつた。

四月になると、相手は、麴町に邸宅を買ひ込んだ。昔、津田英學塾のあつた近くの、閑靜な宏壯な家であつた。そして、相手から、その家の調度や、模様替を、美知子の好みに依つて、やりたいと希望して來たので、美知子は結婚前から、その家に出入して、買物をしたり、女中を雇つたりした。

まことに、結構づくめの縁談であつた。が、美知子は、相手が金に委せて、自分を一つの買物として、買つたのではないかと云ふことが、何よりも氣が／＼りであつた。

豪華な飾り棚に飾られる人形ではないかしらと云ふことが不安であつた。素直だが、敏感な美知子は、金で買つたと云ふことを忘れて、相手から、本當に愛して貰ひたかつた。また、自分も物質の問題を離れて、良人を愛したかつた。

美知子は、誰かを愛し、また誰からか愛されずには居られない女であつた。

見合の印象でも、嫌だとか虫が好かぬなどとは思はなかつた。たゞ、相手の感情の在り處が分らなかつた。

京都大學を、今年卒業した筈の、粕谷の物やさしい性質が、胸が痛くなるほど思ひ出されて來た。

「この分で行けば、明後日もお天氣だらうけど、春の天氣は變り易いからね。お式の日降ると、いろ／＼不便ね。」

と、母は歩みを止めて、眩しさうに、空を見上げた。

母の美しい髪から、丁香香の匂ひが、ほの／＼とかをつた。

飯田橋の大神宮で式を挙げ、赤坂の星ヶ岡の茶寮で披露宴を張った。

南洋に永くゐた人だけに、知人はごくわづかであつたが、みな一癖ありさうな人物ばかり集まつてゐた。

島田に結つて、うつむいたまゝでゐた美知子は、胸が悪くなるほど疲れてしまつた。

新郎は、花婿らしい慎しやかなど少しもなく、お客達と盛んに、杯を應酬して、時間を忘れてしまひ、箱根まで自動車で行くと云ひ、十時近く會場を出たが、自動車に乗ると、すぐ酔を發したと見え、美知子が横に坐つてゐるのも忘れたやうに、グウ／＼いびきをかいて、眠つてしまつた。

箱根で二日ばかり宿つて、蒲郡へ行き、伊勢參宮をして歸つて來たが、良人はその間も、やさしい愛情を示すやうな言葉は、一言も云はなかつた。

魏町の新邸の主婦になつた美知子は、花のやうに美しかつた。束縛されることは、何にもなかつた。

「これは、家の費用とお前の小遣ひだ……」

さう云つて、當座預金の通帳と、それを引き出すための小切手帳とをボンと投げ出してくれ

たが、通帳を見ると、一萬圓と云ふ金額が記入されてゐた。

今まで十圓の小づかひだつて、自由でなかつた美知子は、思ひがけない大金を託されて、茫然となつてしまつた。

そのくせ、結婚して以來、何一つ良人が見立てゝ買つてはくれなかつた。

「私、ハンドバッグを一つほしいんですの……」

と、少し甘えて話しかけると、

「買へばいゝぢやないか。」

であつた。

「洋装をして見たいと思ひますの。私に、洋服似合ふでせうかしら？」

と、相談をしかけると、

「うん、似合ふだらう……」

と、それきりだつた。

海外で、赤手で鍊ひ上げた人だけに、豪快な性格で、こせ／＼した事は、一切きらひらしく、美知子の事や、家事のことには一切口出しをしなかつた。

美知子は、勿論幸福で良人を愛し始めてゐたが、たゞ取りつく鳥のないやうな良人の行動が、なんとなく物足りなかつた。

一日隔き位に家を出て行つた。丸ビルにある事務所へ出かけて行くらしかつたが、何處へ行くとか何時頃に歸るなどは、一言も云はなかつた。晩の食事の支度などに就いても、何も云はなかつた。

美知子は、良人が留守になると、庭の芝生に突き出たやうに作られてゐるサン・ルームで編物をしてゐた。

彼女は、楽しかつた。しかし、良人に愛されてゐるのか、ゐないのかが絶えず不安であつた。

仲人の言葉に依れば、良人が自分を一目見て、とても好きになつたと云ふのだが、それにしては結婚して以來、良人は愛するなどと云ふことは、一言も云はないのであつた。

自分が、良人の氣に入つてゐるのかゐないのか、それさへ美知子には分らなくなつてゐた。結婚した途端に、良人は自分に對して、幻滅を感じたのではないかと云ふ不安さへこの頃は感じてゐた。

手藝の上手な美知子が、二人の頭字を入れて、水色とえんじのスリツパを作つて寢部屋の扉口に、そろへて置いて、良人はそれを無雑作にひつかける丈で、美知子の心づかひなどには、全然氣がついてゐないやうだつた。

結婚して四ヶ月位経つた日であつた。美知子が銀座の美容院へパーマメントをかけに行き、相當手間取つた上、ドライヤーで乾かしてゐる間に、齒が痛み出し、齒科醫へ寄つて家へ歸つて見ると、八時近くであつた。

とつくに歸つてゐる良人は、居間で新聞を読んでゐた。

叱られるかと思つて、扉を開けると、

「腹が減つてるよ。」

と、云つたぎりだつた。

「すみません。美容院へ行つて遅くなりましたの。それに齒が痛んだので、お醫者へ行つて抜いて貰ひましたの。」

「齒醫者へ行つたのか。」

「ええ。前から、少しくらついてゐましたの。奥齒に虫がついて、こゝんとこ……」

と、少し甘えたい気持もあつて、子供がイーをするやうに、上歯と下歯を喰ひしげつて、唇を思ひ切つて開けて、抜いた歯の跡を見せようと、良人の方へ顔を近づけたが、良人は、「うん……」

と、云つた丈で、夕刊の相場記事から顔を上げようとしなかつた。

美知子は、間の抜けた思ひをしなから、

「笑ふと、見えないでせうか。」

と云つた。

「何が……」

「いやだわ、歯よ。」

「醫者に相談なさう——」

と、云つた。

(笑ふと見えるか見えまいか……) そんな事位、醫者に相談する事かと思ふと、美知子は良人が、自分の事など、全然考へてゐてくれないのだと思ふと、悲しくなつて、眼に涙がたまつて来るやうな感じだつた。

三

二年経つた。美知子は、二十四歳、白い睡蓮のやうに、清楚な夫人であつた。

その間に、良人は二月位の豫定で、南洋へ三度ばかり行つた。

美知子が、一度連れて行つてくれと云ふと、良人は、

「南洋なんか、女の行くところでない！」

と云つたぎり、新婚の美知子を殘して何の未練もないやうに、出發するのであつた。留守

中の心掛などについても、良人は何一つ指圖しようとはしなかつた。

美知子の實家の借債は、すつかり整理され、美知子の父は、良人の事務所仕事で興へられるやうになつてゐた。

美知子としても、生活的には、満ち足りて、何の不足もなかつた。たゞ、美知子は、良人から、ほんたうの愛情の一寸した表示でもほしかつた。

と云つて、嫌はれてゐるやうな感じは少しもなかつた。が、自分で千圓の買物をするよりも、良人の愛情の示された十圓の贈物でもほしかつた。が、結婚以來、何一つ、

「これはお土産だよ。」

と、云つて買つて来たものがなかつた。

良人が、四度目に南洋へ行つた時だつた。

良人は、出がけに、

「今度は、何時もより早く歸つて来る。」

と、云つた丈だつた。

良人が南洋へ行つてから、一月半ばかり経つた頃だつた。四月の二十日頃で、庭の八重櫻が、咲き盛つてゐた。

美知子のサロンには、モーリス・マレシャルのセロのレコードが、かけてあつた。淹れ立てのコーヒーのよい香りが、部屋に一杯だつた。

清らかに、キッチンと併された美知子の美しい襟元を見ながら、一人の青年紳士が、

「御主人は、何時お歸りになりますか。」と、訊いた。

「二、三日中かも知れないわ。」

「ハッキリしないんですか。」

青年は、大きな眼を上げて訊ねた。

「ええ。いつも、電報一つ打つて来ないの。だから、南洋航路の船の時間表を見て、この船で歸るのぢやないかと、想像するだけよ。」

と、美知子は、いたづらつぼく笑ひながら、見返した。

「御主人は、いつも茫漠としてゐますな……」

「さうよ。私の事なんか、この犬と同じ位にしか思つてゐないのよ。」

と、美知子は先刻から、膝にたはむれてゐるワイヤヘヤーの耳もとを撫でながら云つた。

「さうでもないでせう。御主人は、品行方正だと云ふぢやありませんか。奥さん以外に、女性との交渉は、絶無だと云ふぢやありませんか。」

「何うですか、南洋あたりに、いゝのがゐるのかも知れないわ。」

「まさか……」

美知子は、去年の秋あたりから、少し自棄になつてゐた。良人の心が掴み切れないために、

良人の心を試すと云つた氣持も、働いてから、この頃一、三人の男友達も作つて行つた。良人の留守には、男友達と一しよに、ダンスホールに行つたり、ドライブをしたりしてゐた。この青年とも、去年音楽會で知り合つてから、急に親しくなり、美知子のサロンに出入してゐた。良人とも、二三度顔を合はしてゐた。

初戀の粕谷にどことなく似てゐるので、美知子の青年に對する言動には、何となくある情愛が、こもつてゐるのであつた。

が、主人は美知子が、かうした男友達を作ることにも、まるで無關心であつた。

「ねえ。奥さん、御主人は今日は、お歸りにならないでせうね。」

と、坂井が訊いた。

「今日は、大丈夫よ。もう二時ですもの。歸る時は、大抵午前よ。」

「ちや、これから横濱へお供しませうか。少し窮屈ですが、僕のダットサンで、ドライブなさいませんか。」

「えゝ、いゝわ。でも坂井さん、運轉大丈夫？」

「大丈夫ですとも、僕は自動車の免狀も持つてゐるんですもの。」

「さう。でも、京濱國道あたりで、貴君がトラックかなんかに、ぶつつけて、私と貴君とが一しよに、瀕死の重傷なんかになると、問題よ。」

「大丈夫ですとも、自信がなければ、大切な他人の奥さんなんか乗せませんよ。」

美知子の支度は、手間がかゝらなかつた。美知子は、少し薄ら寒かつたので、洋服の上に、

ブロードテールの外套を着て、坂井の運轉する傍へ、ピッタリくつついて坐つた。家を出たのが三時であつたが、横濱へ着いたのが六時近くで、ニューグランドで食事をし、フロリダで踊つて、十時近くにそちらを出たのであるが、途中で前輪のタイヤがパンクし、その修繕に一時間近くかゝつたので、麴町の家に歸つたのは、一時を廻つてゐた。

さすがに、美知子も良人が歸つてゐなければよいと思ひながら、内玄関のベルを押して、女中に開けさせると、氣に入りの女中は、美知子の顔を見るなり、

「旦那様が、お歸りでございます。」

と、云つた。

「まあ！ 何時頃。」

「奥様が、お出かけになると一足違ひに……。」

「さう。そして、私が何處へ行つたか申し上げた？」

「え、坂井さんとご一しよに、お出かけたと申し上げました……」

男友達との交際については、今迄も公然と許されてゐたので、女中があらのままを話したことを、咎めるわけには行かなかつた。

「そして、旦那様は、今何うしていらしやる？」

「九時頃に、お休みになりました？」

「さう。」

美知子は、急いで二階の寢室へ上つて、そつと扉を開けて見ると、ベッド脇のスタンドは、消されて居り、暗い闇の中から、良人のやすらかないびきが聞えて来る丈であつた。

良人に叱られやしないかと云ふ不安は、忽ち消えたが、二ヶ月目に遠くから歸つて來ながら妻が若い男と外出して遅くなつてゐるのに、平然と九時頃、いびきを聞いて安眠する良人の心が、限りなく淋びしく口惜しかつた。

美知子は、自分が遅くなつた事などは、すつかり忘れてしまひ、一途に口惜しくなつて、良人を烈しく揺り起した。

「ねえ。一寸、起きて頂戴！ 久しぶりにお歸りになつたのに……」

すると、やつと眼を覺したらしい良人は、ねむさうな聲で云つた。

「すまん。でも、眠むいんだよ。お前も、お休み。話は明日するよ……」

さう云つて、寢返りを打つと、呆氣にとられてゐる美知子の氣も知らず、またグウ／＼いびきをかき始めた。

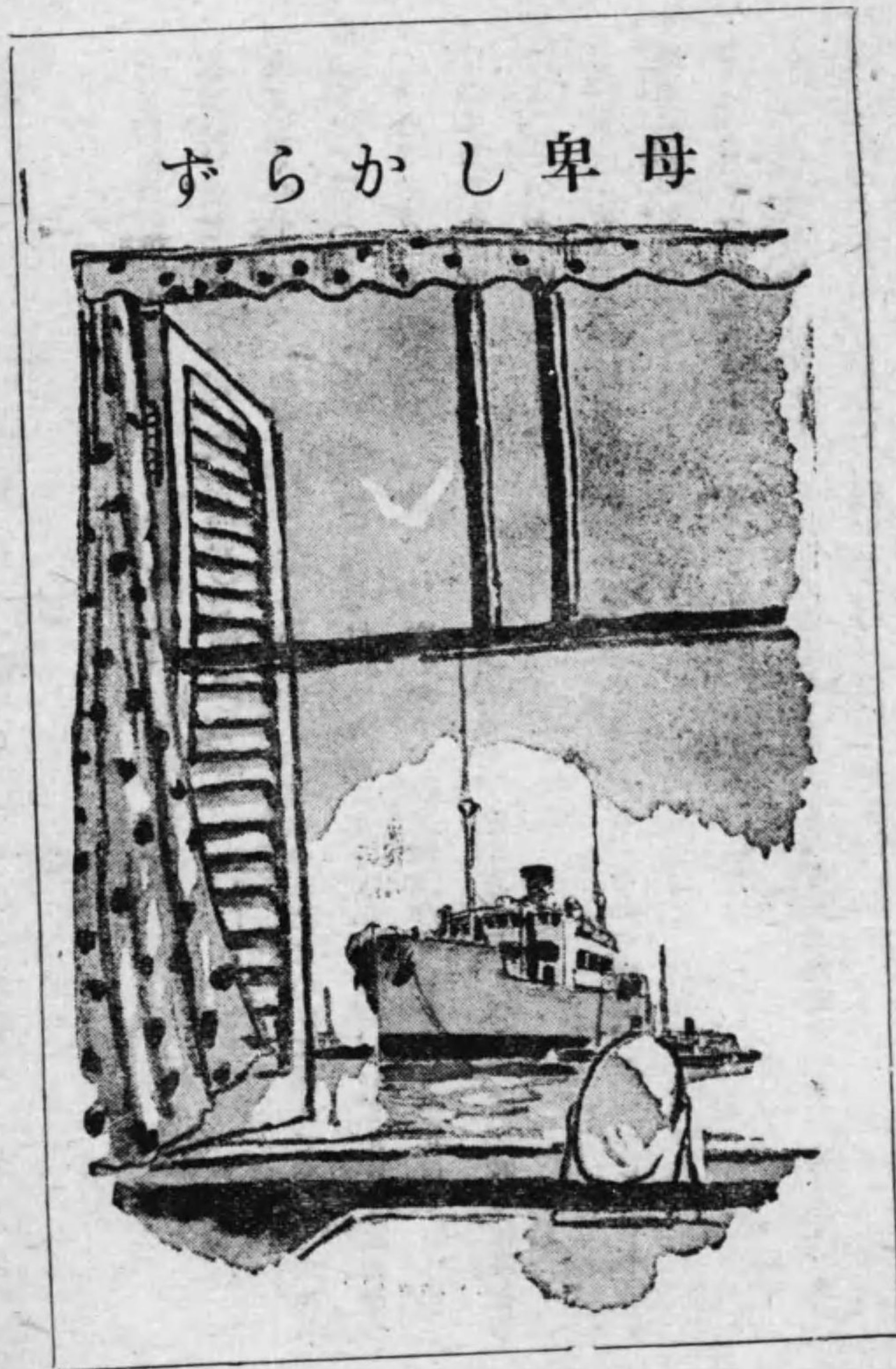
四

美知子の幸福な、しかし何處となく充ち足りない結婚生活は、尙二年續いた。男友達との交際は、自由に許されてゐたが、さすがに天性貞淑な美知子は、妻としての垣を越えるような事は決してなかつた。

結婚して五年目に、美知子は敗血症になつた。發病の原因は分らなかつた。齒根の療治を失敗したのが、その原因ではないかと、醫師は云つた。

美知子が、危篤になつた時、美知子の良人は、病床に付き切つてゐた。刻々に迫る衰弱と戦ふのには、輸血しか方法がなかつた。

母卑しあらず



美知子の血液は、O型であつた。

美知子の良人の血液もO型であつた。

血液を賣る人々が次ぎ／＼に雇はれた、それでも不足であつた。すると、病床に一睡もしないで付き添つてゐた良人が云つた。

「僕の血を取つて貰ひませう。半分位は、やつてもいいですよ。」

「半分取ると死にますよ。」

醫師は、悲しい微笑を見せながら、云つた。

「いやあ！ 大丈夫ですよ。僕は頑健そのものですから。どうか思ふ存分、これにやりたいと思ひますよ。」

「はあ、さうですか。」

附添の醫師は、熱烈なる夫婦の愛情に打たれて、輸血の準備をし始めた。

が、昏々として、横はつてゐる美知子には、良人の言葉も、さうした涙ぐましい情景も、分る由もなかつた。

七月初旬の晝過ぎのギラ／＼と輝く太陽が、窓の外の日覆に強く照りつけてゐた。

窓は明け放してあつたが、風が無いので部屋の中は、ムツとしてゐた。

直ぐ近くの十二天の海岸で、泳ぐ人々の騒ぎ聲が、煙のやうにほのかに聞えて来る、本牧小港のチャブ屋（リリー・ホテル）の二階では、十人あまりの若い女達が、いぎたなく寝轉がつて、チューイングガムを噛じつたり、煙草を吹かしたり、映畫雑誌の頁をめくつたりしてゐた。

宿つてゐた客を返して、一眠りして起きたところで、之から風呂には入つて、夜の化粧をし始めようと云ふ中間時である。

どの女も、まだ二十歳前後で、美しい顔立の子もゐたが、その皮膚は、みんなしまりがなく不健康な職業を語つてゐた。

「ねえ、この男、昨夜のジョウに似てゐるぢやないの……」

と、一人が映畫俳優のグラビアを仲間の女達の誰にもなく見せた時だつた、廊下にパタパタと小走しりの草履の音がして、四十を三つ四つ越したらしい女が、

「ねえ、ちよいと弘ちゃん。お太鼓低過ぎやしない？」

と、弾んだ聲で云つて、螢草の模様のある名古屋帯を締めながら、這入つて来ると、いきなり後向きになつて見せた。

これは、チャブ屋の、をばさんのお品で、吉原で云へば、やりて婆に當つてゐた。

すらりとしたお品が、きちんと束髪に結つて、明石縮などを着て、帯を高く締めると、昔の素性のいゝせぬか、ちゃんとした良家の奥様に見えるのだつた。

「ママは、昨日から、いやにはしやいでゐるわねえ。また、京都の戀人が来たの？」

シュミーズ一つで、婦人雑誌を見てゐた女が、パーマネントの顔を上げて云つた。

「さうよ。今日は、九時頃から起きてそは／＼してんのよ。」

「あたいなんか、十時に叩き起されちやつたわ。」

「あたいもよ。」

と、女達が口々に、からかひ半分お品に喰つてかゝるのを對手にせず、

「ね。低過ぎやしない？」

と、浴衣に黄色い兵児帯をしめた、一番あどけなく見える弘子に、帯のお太鼓について、念

を押した。

低いと下品に見えるのを、氣にしてゐるのだつた。

「高過ぎる位よ。」

と、弘子が云ふと、安心したやうに、帯を締め終つてから、女達の方に打ちとけた顔を向けた。

色が白く、瓜實顔で、以前はやはりチャラ屋女であつたに拘はらず、どこかに氣品があり、今日のやうに黒い明石縮の上品な柄の着物などを着ると、素人の婦人と云つても、少しもかしいところはなかつた。

「をばさん、本當にいゝ事があるのよ。」

お品が、自分で告白すると、

「うわッ！ 奢つて。」

と、女達は、一齊に聲をあげた。何でもない事に騒ぐのが、かうした女達の習慣であつたしこの（リリー・ホテル）にゐる三人のをばさんの中では、お品が人柄もよく、女達に親切で、皆から好かれてゐる丈に、その騒ぎは大きかつた。

ちらりと腕時計を見ると、お品は彼女達の騒ぎを一層掻き立てるやうに、

「本當は、をばさん、其の情人に會ひに行くのよ。」

と云ふと、逃げるやうに廊下を走しり去つた。その後を見送りながら、女達は、また一齊にはやし立てた。

「三時半過には着く筈だが……」

お品は、何度も自分の腕時計と、驛の電氣時計とを比べてゐた。

何時になく時計の針の動き方が遅いやうな氣がして、ホームから線路の彼方をのぞき込むやうにしながら、上り列車の來るのを待つてゐた。

「汽車が着いた時も、あまりはしたなく、あわてゝはいけない。」

と、自分に云ひきかせて居たのであつたが、横濱着の上り列車が、轟々とプラットフォームをゆるがせながら、進入して來ると、物賣や赤帽達の喧騒の中で、お品も待つてゐる人がどの三等車から降りて來るのだらうかと、狼狽へてしまふのであつた。

客車から客車へと、降り口を氣にかけながら、探し廻つてゐるお品の後から、

「お母さん！ お母さん！ 僕此處。」
と、力強い聲がした。

「えつー！」

と、振り向くと、二間ばかり向ふに、彼女に似た美貌のすらりとした制帽を被ぶつた大學生が、懐しげな微笑を見せて立つてゐた。

「まあ！ 恭一。」

一年振りに會ふたつた一人の肉親である、一人息子を見上げたお品の眼には、はや母親としての歡喜の涙が、こぼれさうだつた。

「お母さん。少し瘦せたやうだねえ。身體を大事にしてくれなくつちや。」

と、云ひながら、息子は母に寄り添つて歩き出した。

「そんな事ないよ。母さんは、去年より肥つたと思つてるんだが……」

と、云つたが、お品は自分の身を案じてくれる息子の心づかひの優しさで、もう胸が一杯だつた。

それに恭一は會ふ度に、惚れ惚れするほど、立派な青年になつて居るのだつた。

少し瘦てはゐるが、すらりとした背丈、美しい鼻筋、濃い眉、それらが、母親に似た細面に包まれて、優雅な態度と共に、お品にはまだ十二三の子供のやうに、抱きしめてやりたいやうな愛情を覚えるのであつた。

息子と一しよにプラットフォームを改札口の方へと、急ぎながら、ホテルでの馴染客に會ひはしないかと云ふことが、お品にとつて、心配の種だつた。

お品は、自分一人の時には、決して乗らないタクシーで、息子と一しよに、横濱驛から鷺山の家へ、走しさせた。

自動車に乗ると、お品は別人のやうに、お饒舌になつた。

息子に會はなかつた一年間の出来事の内、話してもいゝことを一度に喋べつてしまはうとしてゐるかのやうだつた。

恭一は、軽く合槌を打ちながらも、何時もの事なので、母子の親しさの感情で、かるく聞き流してゐた。

吉田橋の近くへ來ると、

「おや、フランスの船が入つてゐるのですね。」

と、町の酒場や商店に出てゐる三色旗を見て云つた。

お品は、何気なく、

「さうだよ。昨日、フランスの軍艦が、三隻入港したの。」

と、云つた。

すると、恭一は、母の顔を見ながら、

「それぢや、マルセルさんのお家も忙しいんでせう。」

と、訊いた。お品は、恭一の何気ない間にハツとした。

彼女は、恭一には、本當の自分の職業は隠してゐた。マルセルと云ふフランス人の家の家政婦になつてゐることにしてあつた。

思ひがけぬ恭一の間、サツと顔色まで變りさうになつたのを、いけない！ と、踏張る心で、

「さうだよ。それで、母さんも今夜は五時頃には歸らなまやいけないの。」

と、咽喉にひつかゝる聲で答へ、お品は顔の汗を拭いた。

素直な恭一は、母のさうした動搖には、氣がついた容子もなく、

「東京の法科に行つてゐる友達が、横濱にゐるんです。今度歸つたら、ぜひ遊びに来てくれと手紙をよこしたから、今晚でも訪ねて見る。」

と、朗かに云つた。

しかし、母は自分の心の中に、そつとしまつてゐる暗い秘密の箱に觸れられたやうな思ひがして、しばらく黙りこんでしまつた。

二

それは、長い間息子に對してかくしてゐる暗い秘密の玉手筈だつた。

早く両親に別れたお品は、十六の時から、野毛の伯父の家から近所の輸出向の絹ハンカチ問屋の工場へ、ハンカチの縁縫ひの仕事に通つてゐた。お品は、今ほど色が白くなく、どちらかと云へば、淺黒い方であつたが、若さに潑刺としてゐて、新鮮な果物を見るやうな少女であつた。

十八になると、同じ店の店員に付け文されたり、行きずりに逢つた男に、家迄尾行されたり

澤山の男性から云ひ寄せられたが、それらの多くの誘惑に眼を呉れなかつたお品は、十九の春に二三度荷積みの事で、店に来てゐた船員と戀愛して、伯父の反對を押し切つて、結婚して、皆をアツと云はせた。

良人は、南洋通ひの貨物船の船員だつたが、お品が選んだ丈、船員の割に品行が正しく、優しい心の持主であつた。

結婚してすぐ妊娠し、生れたのが恭一であつた。

良人は、二ヶ月目に一度歸つて来て、十日ばかり滞在してゐたが、別れてゐる間の分までの愛情をこめて、妻と子供とを愛撫した。

お品は良人の持つて歸る金を、つましく使つて、少しづつ貯金も始めてゐた。

お品は、三四年間、幸福の絶頂にあつた。

ところが、突然、全く突然、恭一の四つの誕生を迎へない冬の初に、船會社から使が来て、良人がボルネオで風土病に冒され、同地の病院で療養に努めたが、わづかに七日間の病ひで、死去したと云ふ知らせが来た。

一月位後に、良人の遺骨と遺品と、會社からの弔慰金が届けられた。

あつ！ と高い崖から突き落されたやうな氣持であつた。遠い異郷で死なれた丈に、頭ではあきらめながらも、良人の死が、容易に信ぜられないのであつた。

半年ばかり経つて、

(良人はやつぱり亡くなつたんだ！)

と、背けた時には、少しばかりの貯金も、會社から貰つた弔慰金も、残り少なくなつてゐた。

(何うしよう！)

と、お品は途方に暮れた。伯父の反對を押し切つて結婚した丈に、意地があつて、今更伯父の家へ歸つて行く氣はしなかつた。

伯父の方から、人を介して子供を貰ひ子にでもやり、再婚する氣はないかと云つて来たが、お品は恭一を、死んでも手離す氣はなかつた。

次ぎの年秋の終に、恭一が、風邪がこじれて肺炎になりかけた爲、その治療費のため、殆んど無一物になつてしまつた。

途方に暮れたお品は、普通つてゐた工場へ、再び通ひ始めたが、その零細な工賃では、母子二人の生活を支へることが、出来なかつた。間借をしてゐた家のお婆さんに、五歳になつた恭

一を頼んで家を出るのであつたが、間食代を、お婆さんに渡すことさへ出来なかつた。
苦難の日が一年近く続いた。

さうした彼女に、工場の女工達に、半襟や化粧品を賣りに来る老婆が、親切げに云ひ寄つた。

(お前さんの若さと、その綺麗さで、こんな所で働くのは勿體ないぢやないか)と、云つた。

榮養不良で、蒼白くやせて行く恭一を見ると、お品は金が欲しかつた。

工場の歸りに、老婆に連れられて行つた家は、曙町近くで、表に髮結の看板がかゝつた家だつた。

その家の女主人に云はれた事は、二階へ来る男のお客の、酒の相手をすればいゝと云ふ事だつた。しかし、實際は、まるで違つてゐた。

金のために、身體を投げ出すことは、ひどい耻のやうに思ひ、お品は可なり煩悶したが、それから得たお金で、恭一をどんなに幸福に出来るかを知ると、お品はあきらめた。

(恭一のためなら、どんな事でもしよう)

お品は、さう考へると、心の據り所が出来たやうな氣がし、工場を退つてしまつて、新しい商賣に突き進んで行つた。

稼いだお金で、玩具の電車などを、恭一に買つて歸るとき、お品は幸福であつた。

お品は、髪に油を塗り、白粉もつけ、口紅を塗つて、日ましに美しくなつて行つた。恭一にもぬくぬくした洋服や外套が買ひ與へられた。

恭一は、上品に育ち、山の手の良家の子供達が通ふカトリックの修道尼が經營する幼稚園へ通ふことになつた。

お品は、恭一がすくすくと、若木のやうに成長して行くのが、何よりの楽しみだつた。どんな嫌なお客の相手をするときでも、恭一の事を考へると、お品の胸は、希望に湧き立つて來るのであつた。

小學校では、優等を續けた。卒業する時は、首席であつた。お品の職業が、學校當局へは、薄々知れてゐたので、卒業生總代にすることに就いては、反對もあつたが、素直で母の職業を知らず、朗かに育ひ立つた恭一の秀れた成績は、さうした反對を壓倒した。卒業生總代の役を勤めて歸つて來た恭一を見て、お品は決心した。

(きつと、此の子を大學までやらう)と。しかし、お品は考へた。中學生になつた以上、いつまでも母の秘密を知らずに済むわけではない。恭一に、秘密を知られることは、死ぬよりも怖しかつた。

お品は、いろ／＼考へた末、良人の姉が京都にゐることを考へつき、月々實費を支拂ふことにして、その家から恭一を中學へ通はすことにした。

そして、夏休み丈、恭一を手許に呼んだ。その間丈は、お品は、自分の商賣を休んだ。使はれてゐるマルセルさんのお家で、御用が暇だからと云ふのが、彼女の口實であつた。

中學でも恭一は、優等であつた。一高を受けたがるのを、お品は反對して三高に入れた。三高からも、東京の帝大へ來たがるのを、お品は反對して、京大に入學させた。

愛兒に、自分の秘密を知られることを考へると、別居することは、まだ忍ぶことが出來た。

その間に、お品は、さうした女達の落ちて行く當然の経路として、本牧のチャブ屋女となり三十五のとき、もう商賣が出來なくなつてから、さうした女達の監督として、お客の取り持ちをする所謂「をばさん」になつた。

工科の學生になつてゐる恭一に、彼女はやはり本當の事を話したくなかつた。そして、恭一

に會ふために、又恭一からの手紙を受けとるために、鷺山に、小ぎれいな一間を借りて、そこから(リリー・ホテル)に通つてゐるのであつた。

鷺山の家についた母子は、母の手料理で、少し早目の晚餐を一しよにした。お品にとつて、こんな楽しいことはなかつた。

「もう一年半で大學を出るんだね。工科を出れば、引張だこだと云ふぢやないの。學校を出てお前がお嫁さんを貰つたら、私はいつ死んでもいゝと思ふよ。ほんとうに、わたしは生甲斐があつたよ。」

と、お品は、涙ぐみさうになつてゐた。

「いや、僕はなか／＼結婚しません、今迄のお禮に、お母さんを樂にさせてからでないと、結婚しませんよ。」

恭一は眞實をこめて、しづかに云ふのであつた。

六時近くなつて、お品はマルセルさんの家へ行くと言つて、家を出た。

「今晚は、九時頃からお客が四五人いらつしやると云つてゐたから、明日でないと歸れないかも知れないよ。」

リリー・ホテルの階下のホールは、赤玉のついた白い水兵帽を、横つちよに被つた、フラン
スの水兵達で割れるやうな騒ぎであつた。

煙草の煙と人いきれと、夏の夜の暑さとでムツとする中で、幾十日目かに陸へ上つた水兵達
は、嬉々としてダンスしたり、手真似で女と話したり、片腕で女を抱きながら、ビールを飲ん
だり、してゐた。

正面の、歓迎のために飾つた三色旗の前の電気蓄音器からは、リシユエンヌ・ポアイエが甘
い聲で、

(愛のさゝやき)を歌つてゐた。

そんな騒ぎの中を、お品は人々を掻きわけながら、新しいお客を案内したり、注文を訊いた
り、金銭の掛合をしたり、眼が廻るほど働いてゐた。

先刻から、汗が身體中に流れて、肌が氣味悪くベト／＼するのだが、襦袢を取り換へる暇さ

へなかつた。

そんな忙しさの中でも、恭一を一年目に見た楽しさで、お品はいそいそと働けるのであつ
た。

「をばさん。今日は御機嫌がいゝんだねえ。」

と、馴染のお客に、からかはれたりした。

地廻りの不良外人が、パーテンの所で、勘定でいざこざを起してゐるのを、うまくなだめて
送り出してゐると、

「お品さん、津島さんが来てゐるわよ。」

と、女の一人に注意された。

「何處？」

「一番奥の隅。」

と云はれて、お品は踊つてゐる人々の間を抜けて、津島の居る方へ走しつて行つた。

津島は背廣を来て居るがまだ學生だつた。金持の息子で、此處の常連の一人で、お品に心付
などを、餘分に呉れるので、お品は、よく世話をやいてやつた。

「をばさん、此處だ！ 此處だ。」

ホールは、青や赤のネオンが灯いて居り、いろ／＼な光線が入り交じつてゐるので、人の顔など二三間先では、ハッキリしなかつたが、隅の方で快活な津島が、手を上げてゐるので、それと分つた。

お品も、若々しく手を振つて、突き當りさうになる水兵を避けて近づいた。

「いらつしやい！」

「今晚は！」

壁にはめこんだ鏡を背後に、椅子に腰を下した津島の前に立つて挨拶しながら、津島の傍に居る連らしい青年と、眼が合つたとき、お品は電撃されたやうなショックを受けて、立ち竦んでしまつた。

お品は、先刻別れたばかりの恭一と、向ひ合つて立つてゐたのだ。

彼女の一生が、そこで轟然たる音を立て、ひっくり返つたやうな思ひだつた。

泣いていゝのか叫んでいゝのか怒つていゝのか、お品は茫然として、聲すら出なかつた。

恭一は、ちらりと母を見たが、すぐ眼を伏せてしまつた。

どんな事があらうとも、自分の居る場所へなど来る恭一でないと信じてゐた丈に、お品の絶望と耻しさとは、彼女の全身の血を氷らしてしまつた。

先刻友達のところへ行くと言つたのは、津島の所へ行くのだつたのか。

「をばさん、何うしたの、顔色が青いぢやないか。……これは、僕の友人なんだ、京都の大學へ行つてゐるのだ、中學時代の友人なんだ……」

「……………」

お品の胸には、親子をこんな耻しい眼に合はせた津島に対する憤怒が、猛然として湧いて來た。お品は、憎惡の眼で津島を見た。

津島は、恭一のかうした場所に、そくはない態度が、お品の感情を害したのだと思つたらしく、

「この人はね、こんな所へ来る人ぢやないのだ。とても、眞面目なんだ、僕が只のダンス・ホールだと云つて連れて來たんだ、先刻から歸らう歸らうと云つてゐるのだが、とにかくビールを飲んで……」

と、云ひかけると、お品は、津島の顔に投げつけるやうな烈しさで、

「貴方は、何うしてそんな人を、連れて来るんです！」
と、詰じつた。

お品の必死の意気込に、津島はタジメとしながら、
「たゞ見物させる丈にだよ。」

「今日は、すぐ歸つて下さい。お願いですから歸つて下さい。津島さん、後生ですから歸つて下さい。」

涙さへ見せて、悲鳴に似た聲を出すお品の見幕に、津島は苦笑しながら、

「をばさん、今日はヒステリーだね。」

と、云ひながら、素直に恭一を促して立ち上つた。

夏休みのために仕立てゝ置いた麻の單衣を着て、人混の中を縫うて廊下に出る恭一の後姿を見たとき、お品はフラ／＼と腰が砕けて、床の上に倒れてしまつた。

四

多くの人に擔がれて別室に移つたお品は、すぐ気がついた。軽い脳貧血だつたのだ。一時間

ばかり寝てゐると、気分も恢復した。

しかし、心に受けた傷は、あまりにも大きかつた。

彼女の一生のたつた一つの目標であつた恭一が、彼女に愛想をつかし、彼女の手許を去りはしないかと云ふ恐怖は、大きかつた。

全く一瞬の間に彼女が一生かゝつて築き上げた樓閣が、眼の前でグラ／＼と崩れ去つたやうな気がした。

まさか、このまゝ自分を去る恭一ではないと思ひながらも、彼女は怖しさに、心がふるへた。

鷺山の家へ歸つてゐるだらうとは思ひながらも、そのまゝ追ひかけて行くのが怖しかつた。

十二時近くなつて、お品はホテルの主人から暇を貰つて家へ歸る決心をした。

恭一よ、どうか家にゐてくれ、お品は合掌したい氣持だつた。

圓タクは、坂の下までしか行かなかつた。

十間ばかり坂を上つて、角を曲つたときお品は、

「あつー」

と、軽い喜びの聲を上げた。

自分の部屋に灯がついてゐたからであつた。お品は、嬉し涙をポロポロとこぼした。家の表まで走したが、ハタと立ち止まつた。

(恭一は、あんな汚らしい場所にある自分を何と思ふだらうか。みんな恭一のために、した事だが、恭一はそれを諒解してくれるだらうか)

それを思ふと、お品は足がすくんだ。が、恭一に、どんなに怒られてもいい、たゞ恭一が自分を離れて呉れなければいゝと思つた。

格子戸を叩くと、階下の人が起きて、かゝつてゐた鍵を開けてくれた。下の人に、夜遅く歸つて来た託を云つてゐると、二階に物音がして、階段から、

「母さん、母さんぢやない？」

と云ふ恭一の聲がした。やさしい聲だつた。いつもの思ひやりの深い、愛する恭一の聲だつた。

お品が、だまつて上りわづらつてゐると、

恭一はトン／＼と降りて来て、

「母さん、何うしたの。早く上らない？」

さう云ふと、恭一は母の腰を抱くやうにして二階へ上げてくれた。

お品は、もう何も云ふことがなかつた。恭一の肩に顔を伏せて、安心と喜びとから来る嬉し

泣きを、しばらくつゞけてゐた。

「母さん、僕が悪かつた。すまなかつた、ゆるして下さい。」

「……………」

「僕、ほんとうにすまなかつた。ほんとうにすまなかつた。僕は、お母さんが僕を育ててくれた有りがたさを、しみ／＼感じた。」

恭一は、自分の胸に顔を伏せてゐる母の肩を、かるく叩きながら云つた。

「いゝえ、恭一、お母さんこそ、お前に云ひわけが……………」

母が、むせびながら云ひかけると、

「何を云ふのです。すまないのは、僕の方ですよ、僕は高等学校には入つた頃から苦學すべきだつたのです。すみません…………お母さんに、苦勞をかけて…………でも、お母さん、彼處は今日限りよして下さい…………。僕苦學でも何でも出来ますよ…………。お母さんと一しよに京都へ行つて暮

雨 雷



しませう……」

感激にふるへながら、恭一は一語一語切つて言つた

「よしますよ。すぐにでもよせますよ。もう、お前が大學を出るまでのお金は、ちやんと貯金してありますよ。たゞねえ、お前が結婚するにしても、二千圓や三千圓は、入ると思つてねえ

……それで、私はお前に悪い／＼と思ひながら、つゞけてゐたのですよ……」

母は、愛兒の幸福以外、何にも考へてゐないのだつた。

岩野一彦と小山春三の二人は、一高への入學試験の勉強に、この安養寺と云ふ沼津から大分は入つた田舎の禪寺に来てゐた。

沼津からバスで、小一時間も揺られて、それからまた、一里近くも田圃道を歩いて來なければならぬ、それを閑寂な原の中の禪寺であつた。

しかし、仲々格式のあるらしい寺で、此處の老師は、三島の大きな寺の住職もしてゐる高僧で、小山の父が、この老師の人格に傾倒してゐて、時々參禪に來ることもあるので、愛息とその友人の勉強に、この寺の閑寂さを選んで、一夏の滞在を頼んだのであつた。

老師の遠縁に當る老婦人が、炊事をやつてゐたが、この人も都會生活に經驗のある上品な人で、氣の利いた世話をしてくれるので、二青年の両親は、いろいろな意味で安心してゐるのであつた。

本堂から山門まで、ほぼ一町ほどあるその前庭には、松葉ぼたんが、黄だの、赤だの、桃色だの、乾いた土の上に全く美しく咲いて、ひらひらと季節はづれの蝶が飛ぶときなど、夢みる

やうなのかな景色であつた。

山門の脇の、大きい百日紅は一枝だけ開花してゐた。鐘樓に昇ると、大きな眺望が展けてゐた。朝の五時と夕方の五時には、この鐘が澄んだそして莊重な響きを、遠い音落に、ひろびろと傳へるのであつた。

一彦は十九で、春三は十八で、二人とも今年の春、中學を出たのであつた。

一彦は、四角い感じの精悍な容貌をしてゐた。春三は色の白い髪、濃い涼しい眼をした美少年であつた。

二人とも、勉強に必要な教科書、参考書、ノート以外の書物は、何も持つてゐなかつた。精進料理が、原則なのだが、老婦人の心づかひで、三日に一度位は、魚肉が食膳についてゐた。が、二人とも喰べ物には、ぜいたくを云はない方だつた。

二人とも、その年の春の失敗を雪辱する意氣に燃えて、眞剣な勉強をつづけた。二人が來てから、十日も経たない頃、一彦の身の上に、祖母の死と云ふ思ひがけない事件が起り、彼は春三を捨てて、あわただしく東京へ歸つてしまつた。

春三は、一人になると、妙に落着けなかつた。彼は、一彦が居なくなつた翌日から、朝鐘を

掩きに行く、恰度春三と同じ年頃の若い僧と一しよに、鐘樓へ上つて見たり、また鐘の聲に起き出す村の、まだ露の乾かぬ野道を、一人で長いこと歩き廻つたり、また朝十時頃まで、ボンヤリ机の前で考へこんだり、食事の時、急にカツレツが食べたくなつたり、刺身がほしいと思つたりした。

八月に入ると、百日紅の赤いしづくのやうな花が、どの枝をも色どり、鐘樓の石崖には、のうぜんかづらがオレンジ色のやうな花をつけ、明るい陽の下で、花の色に圍まれた山寺はお伽新の國のやうな嘯みたいな明るさに充ち満ち、寺らしい陰気さは、何處にも感じられなかつた。

陽の光が、チカ／＼と眼に痛いやうな眞晝であつた。春三は、本堂の下の日陰になつてゐる石疊の上に腰をおろすと、松葉ぼたんの花を眺めて、ボンヤリとしてゐた。すると、山門から本堂へ来る前庭の景色の中に、降つて湧いたやうに、白い洋装をした若い女の人が、ポツンと立つてゐるのに気がついた。

眞晝の静寂さを、身に滲みるほど感じてゐた折からとて、彼の居る本堂の日陰から明るい明るい陽の中に立つてゐる女性を見ると、それは生きてゐる人でなく、何か宙に浮いた女の幻のやうで、春三は妙にドキンとすると、心臓が麻痺したやうになつてしまつた。……女性は、松葉ぼたんの生えた芝生の中の道を、ぶらぶら本堂の方へ歩いて來た。そして、其處に春三の居るのに気がつくくと、白い齒がちらと光つて、眉が明るく上ると、生々と動く眼が、彼に笑ひかけた。

春三は、カツと赤くなると、ぎこちなく立ち上り、本堂に上つて縁づたひに、自分の部屋には入つてしまつた。

恰度、美しい笑聲に追はれてゐるやうな感じであつた。彼は、参考書やノートの散らかつてゐる机の前に坐つた。彼の心臓は、をかしいほど、胸の中で躍つてゐた。

彼は堪らなく恥かしくもあれば、楽しくもあり、會て感じないほどの興奮を感じてゐた。

こんな山寺を訪れる女性としては、若くてあまりに美しく、ハイカラ過ぎるので、春三の胸には色々な想像が湧いた。沼津にでも來てゐる避暑の人だらうか。……そんな事を考へてゐる間に、何時もそれから夕食まで、散歩の時間に當つてある夕方五時が來てしまつた。

庫裡を出て行く若い僧の聞き馴れた足音がした。春三は、それに誘はれたやうに立ち上るとその足音を追つた。

鐘を打ち終つた僧と共に、鐘樓を降りて来ると、春三は先刻の女性が、今度は和服で、直ぐ近くに立つてゐるのを見て、危く石段を踏みはづしかけた。

女性は僧に會釋した。春三が、あきれたやうな表情をしてゐると、またあの晴やかな笑ひを見せて、彼にも會釋した。そして、

「きれいですこと……」

と、齒切のよい聲で云つた。花のことらしかつた。

僧は、黙つてうなづく、春三とその女性とを残して、庫裡の方へ行つてしまつた。

彼女は、晴やかな、少しずるいやうな薄笑ひを浮かべながら春三に、

「御勉強に来て、いらつしやるんですつて……」

と、云つた。

この言葉で春三は、彼女がこの寺のお客だと云ふことを諒解しながら、何となく楽しい氣分で、彼も明るく頷づいた。

「男の方の入學試験は、私達の結婚問題位大事なのね。」

と、彼女は大膽な明るい調子でつけたした。

若い女の人から、こんな風に隔てなく、物を云はれるのは、楽しかつたが、子供扱ひにされてゐるやうな氣味もあつて、春三は、一寸拗ねたいやうな氣持にもなつた。

「何にもありませんのね、此處は……先刻、あの丘に上りましたの……あの樹、珍しいんですつてね。ユーカーですつてね……山羊がゐましたわ。」

山門から、右に一町ばかり離れた丘を指しながら云つた。

「此方の方へ行きました？」

と、春三も、相手の親しさに誘はれて、鐘樓の下の爪先上りの、裏山にのぼつて行く小徑を指して訊ねた。

「うへえ。案内して下さいませ。」

と、相手の女が云つた。

彼は、頷ぐと、ひらりと四尺ばかりの崖を、下の小徑に飛び降りた。

「危いわ……」

と、彼女は笑ひながら云つた。

彼も、見上げて笑つた。

彼は、不意に、たうの昔から、お互ひに知合であつたやうな気がした。彼女は、稀に見るほど美しかった。何から何まで繊細で、聡明で、しかも何處か可憐な感じに充ちてゐた。

二

三四日、朝夕の散歩を一緒にしてゐる裡に、二人は、すっかり仲よしになつた。彼女は、前川早苗と云つて、この寺に居る老婦人の妹の子であつた。何のために來てゐるのかは、春三には分らなかつた、それから年齢も……春三は、自分より年上でも、二つ三つ違ひだらうと思つてゐた。

知合になつてから、五六日目であつた。朝の散歩には、彼女はつき合はなかつたが、夕方散歩の時、彼女の方から、春三の部屋に誘ひに來た。散歩の目標は、何處と云ふ當はなかつた。

寺の一町ばかり西にある沼の側へ行つて、水すましの運動を見たり、その沼から流れ出てゐる小川の畔で、裸で遊んでゐる村の子供達を見たり、丘へ上つて山羊をからかつたり、ユーカーの樹の下で流行歌を歌つたり、岩の上に並んで一時風に吹かれて居たりした。その日は、富

士に暗い雲の出でゐる蒸し暑い夕暮だつた。裏山の方へ行くと、蚊やぶよがゐて、早苗は眞白いふくらはぎを、幾個所も赤く、はらしてしまつた。早苗は、浴衣の裾を少しまくつて、

「こんなになつたわ」と、春三に見せた。

山を降りかけると、はげしい急流になつた。

忽ち、凄まじい風も加はつて、二人ともびしょ濡れにぬれてしまつた。

雷がだんだん近くなつて、二人が山門に近づくと、地軸を揺がすやうに鳴り、早苗は何か叫ぶと、いきなり華奢な春三の身體に抱きついた。

着物の上からでも、肌痛いほどの雨で、もう庫裡まで、かけ込む勇氣がなく、二人は近くの鐘樓にかけ上つた。

撞木も端の方は、しぶきに濡れてゐた。鐘の下の土も、圓く土俵のやうに眞中だけを残して、濡れてゐた。二人は鐘の下にうづくまつた。

空には、描くやうに、枝の分れた稻妻が走つて、腹立しげな雷鳴が、追ひかけるやうに、地や空を叩き廻つた。

「凄いなア。」

「雷きらひよ。」

雷の音に、二人の聲は消されがちだった。

春三は、かうして二人ぎり、ゐることに、新鮮で甘美なものを感じた。彼は、恐ろしさうにしてゐる早苗の方を、時々追ひかけるやうに見つめて、これは自分が彼女に戀を感じてゐるのだ、たしかにさうなのだ、これが戀なんだと、自分の心にうなづいた。

雷鳴は遠ざかつて行つて、空が明るくなり、雨も晴れかけてゐた。

周囲が明るくなつたのに、まだ早苗が蒼ざめてゐるので春三は、

「弱虫だな貴女は……」

と、云つた。

早苗は、睨むやうに春三を見ると、いきなり春三の右の手を取ると、その人指し指を口に入れて、グツと噛んだ。

「痛いー」

と、春三は、彼女の蓮葉な所業に、どきまぎしながらも、陶然とした氣持になつた。

「貴君は私のこと、何う思つてるの？」

と、早苗が、不意に訊いた。

「……………」

春三は、眞赤になつたが、返事が出来なかつた。

「貴君は子供ね。」

早苗は、春三の眼を見つめて謎のやうに云つたが、直ぐ續けて、

「ああ厭、厭。先刻の雷が、この鐘樓に落ちればよかつた。さうすれば、サツパリしたんだわ。でも、貴君は私と死ぬのいやでせうね。」

と、ヒステリックに云ふと、不意に両手で顔をかくした。

春三は、おろおろした。

（僕も、死んだつていいよ）

と、云へばよかつたと、後では思ひついたが、その時は何も云へなかつた。ただ、早苗のかくされた不幸を慰めるためなら、どんな事でもしていいと云ふ氣がしてゐた。

あたりには、一面に光が満ちて來た。もつともそれは、すぐ暗くならうとする夕暮の光では

あつたが——。

「おやおや、こんな所にゐたのですか。」

若い僧が、鐘樓の下から二人に呼びかけた。

春三はぎくつとしたが、早苗は平素の明るい調子で、

「大變な雨だつたわね。ここへ駆け込むまでに、こんなに濡れたのよ。」

と、浴衣の袖をしぼつて見せた。

三

春三は、それからは朝夕の鐘も、今迄のやうに、只心なくは聞かれなくなつた。

何か名状しがたい感じが、彼の全心を揺りうごかしてゐた。眼が覺めると、彼は自分の胸の中に醜態してゐるものを感じた。何であらう。何であらう。何と名づけてよいか分らなかつた。強ひて名づけければ、早苗と云ふ一人の人間の名を、假に用ふる外はなかつた。

彼は、彼女に結婚の申込をしたと思つた。むろん、今すぐではない、その實現は、遠き未來になるのだが、とにかく約束でもして貰はなければ落着けない氣持であつた。

雷雨の日の翌日の夕方、散歩の時間に、彼は自分の部屋で、彼女を待つたが、なかなか來ないので、彼は自分から彼女を誘ふつもりになり、葉の延びた芍薬のある裏庭の方に廻つて行つた。

彼女の部屋の障子は開けられてゐたが、遠くからでは彼女の姿は見えなかつた。

春三は、縁側に近づいたとき、ぎよつとして立ち止まつた。

彼女の部屋の障子の陰から、男性の聲が聞えたからである。

「歸りなさい——」

男の聲は、りんとして響いた。

「命令なさるの？」

早苗の聲には、男性に對する反撥と、その反撥を裏切るやうな愛情の響きがこもつてゐた。

男の聲は、急に優しくなつて、

「僕が、わるかつた點は、いくらでもあやまる！ 貴女の氣の濟むやうに謝る。とにかく、美

枝子のため丈にも、歸つて貰ひたい——」

春三は、毒を飲まれたやうな氣持になつた。

「……………」
早苗の聲は、それぎり聞えなかつた。
春三は、屈辱と驚きに、心が轉倒して、元來た途を夢中で引き返した。

四

小山春三は、一高から大學の工科を出て、ある重工業の會社の技師になつてゐた。軍需景氣の波に乗つて、三十を出たばかりの若さで、相當の收入があり、母と二人の氣樂な生活をしてゐた。彼と五つ違ひの弟は、大學を出ると結婚して、滿洲國へ行つてゐるが、彼は大學を出て十年近くなるのに、結婚してゐなかつた。

彼は、今年の夏の休暇に母を連れて、伊豆の修善寺へ來てゐた。

家を廻る泉水に鯉の澤山ある宿屋であつた。彼が、風呂から出て、廊下の籐椅子で、涼を入れてゐると、彼の前を二十ばかりの白い洋装の女性が、小走りに駆けすぎた。

彼は、その人を一目見たとき、思はず讀んでゐた雑誌を取り落すほど驚いた。

春三が、この十年以上、心に深く刻まれた苦々しいが、忘れがたい初戀の人の面影を、まさ

まざと見たからである。

その顔の輪廓、後姿、まるで十餘年の昔が、今眼の前に生きて動いてゐるやうな氣がしたからである。

彼が魂を抜かれたやうに茫然としてゐると、その女性は、間もなく引き返して來て、再び彼の前を通つた。

微笑をふくんでゐるその顔を見ると、春三は、

(貴女は……)

と、呼びかけたいやうな衝動をさへ感じた。が、その女性は、彼の方をちらと見た丈で、廊下を駆け去つてしまつた。

彼は、その日一日、十餘年前の思出に耽つてゐた。すると、その夕方宿屋の番頭が、春三の部屋へ來て、

「あの、二階に泊まつていらつしやいます、あの前川さんとおつしやる奥さまが、お差支へがなかつたら、一寸お目にかかりたいとおつしやいますのですが……」
と、云つた。

春三は、

(あつ！)

と、心の中で驚いたが、やつと冷静をとり返して、

「お目にかかつてもいいが、お一人？」

「いいえ。旦那さまと、二十一、二のお嬢さまと三人で泊つていらつしやいます。」

と、番頭が云つた。

春三は、先刻廊下で會つた女性が、何人であるかがハッキリ分つた。

「どうぞ……と云つてくれないか。」と、彼は答へた。彼の胸は、十餘年間閉ぢられてゐた青

春の泉が、またほとばしり始めたやうに、若やいだ情熱に充ち溢れた。

五

「美枝子は？」

所用があつて、昨日東京へ行つて、午後歸つて來た良人は、浴衣に着更へながら優しく妻を
ふり返つた。

「いまお話ししますわ。」

と、良人の洋服を衣桁にかけながら、早苗夫人は微笑して云つた。

「小山さんと云ふ階下のお客さまと、天城の方へ参りましたの。もう歸りますでせう。」

と、云つた。

「男の人？」

「ええ……」

「そんな人と交際して、大丈夫か。」

「大丈夫ぢやないかも知れないわ。」

夫人の聲は、いたづらしく上機嫌であつた。

「困るぢやないか。」

「でも、結婚してもいい人よ。」

「お前は、何うして知つてゐるのだ。」

「私の昔の戀人よ。」

「馬鹿！」

「良人は、笑ひながら坐つた。」

「本當だつたら、何うなさる！」

「何うしたんだ……可笑しいな。お前が、そんなにはしやぐのは……」

夫人は、良人に茶を淹れて、團扇で風を送りながら、

「ほんとに、私少し悪い女だつたの……覚えていらつしやるでせう。美枝子が、七つの時、貴方が、あの厭な事件を起したとき……」

「解つたよ。」

良人は、苦つばい笑ひを浮べた。

それは、夫婦の歴史の中で、一つの汚點でもあり危機でもあつた。妻以外の女性に、良人の心が移りかけたので、勝氣な妻は、良人と最愛の一女を捨てて、身をかくしてしまつたのである。

そのかくれた場所が、安養寺の一室であつた。

信じ切つてゐた良人に裏切られた妻は、生來の勝氣から來る反撥と、美しく純な青年に對する淡い愛情とから、悪いと知りながら、未婚の女性の如く振舞つた。

良人が、間もなく猛然として反省して謝つたので、再び良人の手に戻つた後も、永い年月、

夫人が自分の過失であり、罪惡めいた思ひを感じるのは、この一事であつた。

四五日前、この宿で圖らずも、その人に廻り會つた時、恰度その當時の自分の年齢に近づきかけた娘が、水の低きにつくやうに、その人に慣れ親しんで行くのを、夫人は何か楽しく眺めてゐた。

殊に、小山がまだ獨身であることを聞いた夫人は、その原因には、いくらかでも、自分が關係があるやうに感じられ、罪ほろぼしの意味でも、娘が小山を慕ふのを、嬉しく感じられた。

美枝子に對する小山の態度には、昔ながらの純粹さがあるやうに思つた。

夫人は、過去を語り終へて、良人と眼を見合はせた。

「あの會社の技師なら、月収も随分あるだらう。」

「貴君はいやね、すぐお金の事を云ふのね……。収入よりも、人として、とても感じのいい方よ。」

と、夫人は云つた。

良人は、苦笑しながら、



許

婚

「十以上遠^{とちよ}ふ夫婦^{ふうふ}も、この頃多^{おほ}いからね……」
と、妻^{つま}の計^{けい}畫^{わく}を嘉^{よみ}するやうに云^いつた。

暑い盛りの八月初旬の午後であつた。

丸ビル内のM信託の事務所では、やつと退社の時が来たので、皆汗をぬぐひながらも、やゝ
樂な氣持になり、笑つたり雑談したりし始めた。

ボタン／＼と帳簿を片づける音が、あちらこちらに聞えた。

タイピストや女事務員は、いそ／＼と化粧室へ行き始めた。

突然チリチリと庶務課の電話がなつた。

受話器を取り上げた中年の社員が、

「はあ、はあ。」

と、應對してゐたが、

「瀬川君、電話……」

と云つて、筋向ひの机で、まだ熱心に支店關係の帳簿を調べてゐた、淺黒いきりつとした青
年に受話器を渡した。

立ち上ると、すらりとした立派な體格であつた。

「もし／＼、瀬川でございますが……」

會社關係の用事だと思つて、光澤のある低音で丁寧に云ふと、向ふはぶつつけるやうに、な
れ／＼しい男の聲で、

「あゝ、慎ちゃん、僕道男だよ。暑いね。元氣かい……」

と云つた。

輕井澤へ行つてゐる筈の、小學校以來の親友高山道男だつた。

「やあ、何日歸つて來たんだい？」

「今……」

「何うかしたのかい……」

「うん。まあね。その事で、何處かで會つて話したい。もう仕事お了ひだらう。」

「あゝ、だけど、いゝことか悪いことか？」

「うつつ……僕には、すぐいゝことだ、君にだつて欣んで貰へることだ。その代り、御馳走
するよ。何處で待つてゐようか、山王のスケート場の喫茶部で待つてゐようか。」

「うん。」

慎一は、電話を切ると、もう一度机に向つて、キリのいゝところまで、帳簿を調べて、會社を出た。

「やつぱり、許婚ののろけを、聴かされるのだなア。」

と思ふと、可笑しくなつたが、しかし彼は相手の純真な性格を愛してゐたので、少しも嫌な氣持はしなかつた。

その許婚の手紙や寫眞は、もういく度も讀まされたり、見せられたりしてゐた。

瀬川慎一と高山道男は、同じ年の二十八で、小學時代からの親友であつた。それに、家が同じ麴町の紀尾井町であつたので、兄弟のやうに仲がよかつた、同じやうに、一中から一高には入り、大學では經濟科と工科とに別れたが、二人の友情には、少しの變化もなかつた。

併し、昭和六年の滿洲事變の時、兜町の株式仲買店の支配人をしてゐた慎一の父が、株の思惑違ひから、店に大穴をあけて、私財を全部投げ出して退職した後は、住んでゐた邸も人手に渡つて、一家は小石川林町へ移つた。

そして、慎一と道男は、經濟的にはグツと境遇がかけ離れてしまつたが、二人の友情は變らなかつた。

大學の授業料も、道男が氣を利かして貸してくれたし、大學を卒業した時も、背廣や身の廻りのものを一通り揃へる金も、道男が出してくれた。

二

慎一が、山王ホテルの地下室のスケート場の觀覽席の入口の扉をあけると、ワルツのリズムと一しよにバツと冷たい空氣が、顔を打つた。

學生達や少女が入り亂れて、やゝ灰色のしみた氷の上を、クル／＼と滑り廻つてゐた。

觀覽席の後を廻つて、喫茶部へ行つて、一わたり卓子を見まはしたが、道男の姿は見えなかつた。

朱色に塗つた欄に近い椅子に腰を降ろし、ホープに火をつけて、眼の下の銀盤の上を滑り廻る人達を、ボンヤリ見てゐると、

「おー」

と、肩を叩かれたのでふり返ると、道男の白い顔が笑つてゐた。

「何だい。もつと軽井澤へ居るのぢやなかつたのかい？」

「うん……急用が出来てね。」

道男は、ニヤ／＼笑ひながら、向ひ合つて腰をおろした。

「急用？ 君にでも、急用なんてあるのかい……」

「あるよ。これだ、まあ見てくれ……」

と云ふと道男は、上着の内ポケットから、一枚の封筒を出した。

ちらと、その書體を見た丈で、道男の許婚である京都にゐる清水雅子からの手紙であることが分つた。

慎一は、その女性の手紙をいく度も讀まされてゐた。

少女らしいみづ／＼しい書體で、文章も素直でしとやかで、慎一はそれを讀むたびに、道男に對して、かすかな嫉妬を感じるほどの、好ましい手紙であつた。

「まあ、見てくれ。僕にとつては急用なんだよ。」

と、高山はまたニヤ／＼笑つた。

道男様

「よ／＼十一日の「かもめ」で上京することになりました。二三日前から、母や姉にやい／＼云つてお荷物の支度をして居ります。昨日は、あまりにさわいで、大切なレコードを二枚壊してしまいました。昨夜、貴方に東京を案内して頂いてゐる夢を見ました……十一日までに、軽井澤から歸つてゐて下さいませ。では、お目にかゝるまで、もうお手紙さしあげません。」

雅子

雅子は、道男の許婚で今年京都の同志社を卒業した人であつた。慎一は、今まで道男に、いく度も雅子の手紙を讀まされたし、寫眞も向ふから送つて來る度に、見せられてゐるので、まだ一度も見ない人ではあつたが、その面影や性格は、彼の心の中で、ハッキリ思ひ浮べることが出来た。

京都の西陣でも、屈指の織物問屋の娘で、寫眞で想像すると、京美人に特有な、透きとほるやうな白い肌をした細面に、墨を入れてゐるのではないかと思はれるほど黒々とした瞳を持つ

てゐた。それでゐて、ミツシヨンスクール仕込の、ハイカラな教養が、その高い額に現はれてゐる少女であつた。近代化した京美人と云ふのは、こんな女性であらうかと思はれるやうな、素晴らしい美貌であつた。

「ぢや、いよ／＼結婚かいー」

手紙を封筒に收めて、返しながら云つた。

「いや、今年は十九で、年廻りが悪いから、こちらで洋裁と料理の稽古をして、結婚は來年の節分以後と云ふことになつてゐる。つまり、當分花嫁修行なんだ……」

「それなら、京都に居ても出来るんだが、やつぱり君の居る東京に來たいんだらう。」

と、慎一が云ふと、道男は（我意を得たり）と云はんばかりに、

「うつふ、まあ、さうだらう……」

いかにも嬉しさに笑つて立ち上ると、

「晩翠軒へ行つて、支那料理を、御馳走しよう……」

と、云つた。

三

慎一が道男と、スケート場で會つて以來、半月ばかり道男から、何の音沙汰もなかつた。

あの手紙の通、雅子が上京したので、道男は、充ち足りた幸福に浸りながら、雅子と一しよに遊んでゐるので、友人のことなどは忘れてしまつてゐるのだらうと思ふと、慎一は時々思ひ出して苦笑するのであつた。

八月の末の土曜日の晩、慎一は日比谷の公會堂で催された音樂會へ行つた。この頃、歸朝した岡田みち子と云ふ天才少女が、バツハの「提琴二重協奏曲」を弾くのを、聴きたかつたからである。

休憩時間に廊下へ出て、煙草を吸つてゐると、賣店近くの柱の蔭から、じつと此方を見てゐる二つの瞳を見て、ハツと驚いた。それは、たしかに他人でない氣がしたからである。一度目を見合はし、二度振り返つて見た時、慎一はそれが、道男の許婚である雅子に相違ないと思つた。

やゝ光線の暗い廊下に、まるで浮き出してゐるやうな美しさであつた。萬葉集の（春の苑

紅にほふ桃の花、下照る道に出で立つ少女」と云ふ歌にあるやうな優艶な美しさであつた。白く透きとほるやうな頬、濡れてうるむ黒い瞳、心の優雅さが、そのまゝ現はれてゐて、しかも近代的な睿智の感ぜられる顔だつた。

雅子だ、雅子に違ひない。この人が、萬一雅子でなかつたとしても、雅子はきつとこんな人だと思ひながら、慎一は二三間通り過ぎてゐると、

「よう、慎ちゃん！」

と、後から肩を叩かれた。振り返つて見ると、道男が白い齒を出して笑つてゐた。

「やあ、君が音楽會に来るなんて、珍しいぢやないか。」

「ふうん、一緒に來てるんだよ、例の雅公と……」

と、道男が云ふのを聞いて、慎一はハツと緊張した。やつぱり自分の眼は正しいのだと思つた。

「連れて來る。紹介しよう。」

と、行きかゝらうとする道男を止めて、

「雅子さんと云ふ女は、賣店の横にゐる黒い着物を着た女だらう。」

「さうだ、分つたかい。」

「分るさ。寫眞をあんなに見せられたんだもの……」

「いゝ娘だらう！」

道男は、又ニヤ／＼笑つた。

「いゝどころの騒ぎぢやないね。」

「さうか、認めてくれたか。感謝する、君に早く紹介しようと思つてゐたんだが、來ると直ぐ輕井澤へ行つたんでね。一昨日歸つて來たんだよ。とにかく連れて來る。」

と云ふと、道男は、人混みの廊下を縫つて去つた。

慎一も、直ぐ道男の後から歩いて行くと、此方へ來る道男と雅子とに、顔を合はした。慎一は、紹介される以前から微笑した。

「これが、瀬川君……これが雅子さん！」

と、道男は云ふと、雅子が先づ口を開いた。

「先刻、私のゐる前をお通りになりましたわねえ。」

「はあ、通りました。僕は、貴女だらうと思つてゐたのです。高山君から寫眞をいく度も見せ

られてゐますので、すぐ貴女だと感じました……」

「まあ、いやだわ。誰にも見せちゃいけないと云つてあるのに……」

雅子は、ほのかに顔を赤らめて云つた。

「だつて、瀬川君は僕の親友だもの。君のことは、全部報告してゐる……」

「まあ、いやだわ……」

五尺三寸近い長身だが、言葉つきに、あどけない所があつた。

「道男君から、いろいろな事を承つてゐますから、一目見たとき、他人のやうな気がしませんでした……」

と、慎一が云ふと、

「まあ……それはありがたう。これからも、どうかよろしく……」

と、そのすんなりとした上半身を、下げた。

慎一が、雅子から受けた感銘は、壓倒的であつた。

彼は、雅子のやうな素晴らしい女性が、この世の中に居り、その人と言葉を交はすことが出来た丈で、急に世の中が楽しいやうにさへ思つた。

道男に見せられた手紙や写真で、想像したよりも、實物は實物丈に、完璧であるやうな気がした。

友人の許婚として、時々顔を見る丈でも、幸福だとさへ考へた。

四

翌日は、カラリと晴れた日曜だつた。

朝寝坊をして、十時頃に起きた慎一は、お午過ぎ庭へ出て、フランスの流行雑誌「ヴォーグ」に出てゐる犬の写真をながら、妹の咲子のペットであるワイヤア・ヘアードの趾の後の毛を三色旗の形に刈り込んでゐる所へ、思ひがけず、前夜逢つたばかりの道男と雅子とが、自家用のカデラックで訪ねて来た。

「これから、君を誘つてドライブに行かうと云ふことになつたのだが、雅子に君がレコードの蒐集家だと話したら、是非連れてつてくれと、云ふものだから……」

と、云つた。

さう云ふ道男の後で、濃いグリーンのアフターヌーンを着た雅子が、微笑してゐた。着物を

着ると、壓倒されさうな氣品を感じるが、洋服を着るとあどけなく見え、十七八にしか見えなかつた。

「いやあ、つまらないものばかりで……」

と、慎一は二人を書齋へ通した。

廻町の家から、移るとき、大抵の物は手放したが、好きで蒐めた西洋音楽のレコード丈は、そのまゝ持つて來たのである。彼の十疊の書齋は相對した兩方の壁が書棚になつてゐたが、その書棚の半分近くも、レコードが床から天井近くまで詰まつてゐた。それが、キチンと整理されて、アルファベット順に、配列されてゐた。

「まあ！ よくお蒐めになりましたのね。」

音楽好らしい雅子は、眼を刮つてその前に立ち止まつた。

「古い珍らしいものなら、大抵持つてゐます。最近はお小遣がないのであまり蒐めませんが……」

「まあ、珍らしいのがありますね。」

と、雅子は、二つ三つ取り出して、見てゐた。

「お氣に入つたのがあれば、お貸しします……」

「さう……。ぜひ拜借したいわ。」

さう云つて、幾枚かのレコードを取り出した。

その選擇を見てゐると、慎一は雅子が、音楽に對する嗜好が可なり洗練されてゐるのを感じた。

「これ一つかけて下さいません。」

と、雅子が、慎一に渡したレコードを見ると、それはベルリオーズの「幻想交響曲」であつた。

一時間近くの間、雅子はレコードをかけつゞけた。音楽に興味のない道男は、すっかり飽いてしまつて、庭へ降りて、ワイヤア・ヘッドとふざけ始めてゐた。

「私、音楽を聴いてゐる時が、一番楽しいんですの。」

と、雅子が云つた。

「僕もです。音楽會は、殆んど缺かしたことがありません。」

「さう。私も……。でも、京都ぢや、ロクな音楽は聴けません。東京へ來る一つの楽しみは、

いゝ音楽が聴かれることでした……でも、道男さんはちつとも、その趣味がないので、私悲しいんですの……」

さう云つて、雅子はちつと、黒い瞳を、慎一の方へ向けた。

「でも、貴女が養成してあげればいゝぢやありませんか……」

「でも、こんな趣味は、先天的なものぢやないでせうか……」

「さあ……」

慎一は、道男のことをそれ以上、批評したくないので、だまつてしまった。

夕方近くなつて、道男達は歸つた。

その夜、慎一の母が云つた。

「道男さんは、もうあんな美しい方が決まつてゐるんだから、お前も早く定めてお母さんを安心させておくれ。……此間の尾崎さんのお嬢さんはどう？」

と、母は手文庫の中から、寫眞を取り出した。

父が、相場をやつてゐた頃の親友の娘で、十五六の時に、慎一も二、三度會つたことがある、丸顔の色白の可愛い娘であつたが、雅子の印象で頭の中を掻き亂されてゐる慎一は、母が

出した寫眞を取り上げて見る氣も起らなかつた。

「もう少し待つて下さい……」

と、かるく受け流した。

「二、三萬圓の持參金は、持つて來ると云ふし、こんないゝ口はありませんよ……器量だつて、當世風で申分がないぢやありませんか……」

「えゝ、まあ、考へさせて下さい……」

さう云ひながら、慎一は氣がなささうに、その寫眞を取り上げた。

五

九月の初だつた。

四時少し前、慎一がもう仕事を打ち切らうとしてゐる時、（清水さん）と云つて電話がかゝつて來た。

清水と云ふ聞き馴れない名前に、ハツと駭いたが、それが雅子の名前だと氣がつくと、慎一は身體中が堅くなるほど緊張した。

「瀬川さん？ 私雅子。」

「やあ、しばらく……」

慎一の聲は、かすれてゐた。

「何時かのレコードお返ししたいたんですの。……そして、別な拜借したいの。……お宅へ上りたいんですけど、道を忘れちゃったから、会社で待つてゐて下さらない？ 直ぐ伺ひますから……」

「道男君は、御一緒ぢやないんですか……」

「え、今日は、道男さんとはお會ひしませんの……」

二人きりで、交際つていゝのかしらと思つたが、相手がレコードをお返しに来ると云ふのを断るわけには行かなかつた。

「ぢや、お待ちしてゐます。この建物の一階に、森永の喫茶店がありますから、そこでお待ち

します。」

「ありがたう。ぢや、直ぐ……」

さう云つて、雅子は電話を切つた。

慎一は、雅子と二人きりで會ふ嬉しさと怖しさとで、胸がふるへ出し、仕事はもう手につかなかつた。

この十日ばかりの間も、彼は一日として雅子の事を忘れてはゐなかつた。友人の許婚を思つてはならないと考へながら、彼は毎日思ひつづけてゐたのだ。

その雅子と二人きりで會ふ。それは、慎一にとつて大きい試練に違ひなかつた。

慎一は、開いてゐた机の上の帳簿を閉ぢると、洗面所へ行つて、手や顔を洗つて脱いでゐた上着を着て、會社を出てエレヴェーターで一階へ降りながら思つた。これ以上、雅子を思つてはならない。雅子を美しい藝術品だと考へよう。でなくとも美しい鳥、美しい花と見よう。一個の女性と考へてはならない。異性に對するやうな氣持を絶対に起してはならない。慎一は、心の中で、いく度も、くり返して決心した。

一階の森永の喫茶は、割合に空いてゐた。慎一は、雅子の眼につき易いやうにと思ひ、入口に近い所に坐つた。

注文した冷たい紅茶が、まだ來ない内に、雅子が入つて來た
「お待ちになりました？」

と、直ぐ慎一を見つけて、さし向ひに坐つた。今日は、水色に秋草の咲き亂れた平絹を着てゐた。

「いゝえ。僕も今坐つたばかり……」

慎一は、雅子の自分に見せる親しさから、雅子が友人の許婚でなく、自分の愛人であるやうな幻覺をさへ感じた。

女給仕が、冷たい紅茶を運んで来るのを見ると、

「私にも、冷たいお紅茶をね……」

と、云つた。

「今何處にいらつしやるのです？」

「芝の伯母さんところ……」

「毎日、道男君とお會ひですか……」

と、訊いた。からかふつもりは少しもないのであるが、それがからかひになりはしないかと

慎一は心配したが、雅子は顔色も易へず、

「會つたり會はなかつたりですわ。」

と、返事をした。

その白々とした返事が、慎一には何となく不安で、

「毎日、お會ひにならなくつてもいゝんですか。」

と、訊き返した。

「だつて……もう道男さんと、お話しすることなくなつたんですもの……」

「何うしてですか？」

と、訊いたが、慎一はすぐ後悔した。そんな問題は、第三者の立ち入るべき事ではないと思つたからである。

「だつて……」

と、雅子はうつむいて、メニューをいちつてゐたが、

「お手紙で、交際つてゐた時の方が、ずいつとよかつたやうな氣がするの……あの方……」

「……………」

雅子の思ひ切つた告白に、慎一は返事が出来なかつた。

「私、十六の時お會ひした丈でせう。だから、とてもいゝ方だと思つてゐたの……今だつて、

「方だわ。でも……」

「……………」

慎一は、じつと自分を見てゐる雅子の瞳から、逃れて窓の外の往來へ眼をやつてしまった。
「貴方に、こんな事申し上げて、びつくりなすつた？……私をさぞ蓮葉な女だとお考へになる
でせうね。」

「いゝえ。そんな事ありませんけど……」

「あの方の趣味と私の趣味と、まるで違つてゐるんですもの……。私、すっかり考へ込んで
ますの……」

「……………」

雅子の氣持を肯定することは、友人に對する裏切だと思つたので、慎一はだまりつゞけた。

「許婚つて、絶對なものではありませんわねえ。」

「しかし、道男君は貴女を……」

「えゝ……それは分つてゐますの……しかし、私道男さんと結婚すれば、不幸になることが見
え透いてゐますの……私が不幸になつて、道男さん丈が、幸福になるなんて云ふこと、あるで

せうか……」

「しかし、道男君の趣味位、貴女がいくらでも、變化させることが出来るのぢやないでせう
か……」

「でも趣味なんて、結局先天的なものぢやないでせうか……あの方の考へ方まで、私とはどこ
か違つてゐるやうな氣がしますのよ……」

「困りましたなア……」

雅子が何か云ひつゞけようとした時、ドヤ／＼と五人ばかりのサラリマンが入つて来て、二
人の隣席に腰をかけたので、雅子はそれぎりだまつてしまつた。

それを、きつかけに慎一は、勘定を拂ふと、その店を出た。

雅子が、乗つて來た自動車を待たせてあつたので、それに乗つて、林町の自分の家へ來たが
途中の車の中でも、慎一はあまりに意外な雅子の心境を打ち明けられた激動で、殆んど口が利
けなかつた。さうした雅子と同じ車で、走しつてゐる事さへ、恐ろしい氣がした。雅子は、道
男との婚約を破棄したがつてゐる。もう、精神的に雅子は、道男のものではないのだ。と、す
れば自分は、——雅子を、こんなにまで素晴らしく思ひ、非凡な女性として、その膝下に跪づい

てもいいと思つてゐる自分は、雅子に對して、どんな態度を取ればいいのか。

慎一は、家につくと、雅子と二人きりでゐる重壓に堪へ切れないで、十七になる妹の咲子に、

「ねえ、雅子さんが、いらしたから、お前も来てお相手をしておくれー 兄さん丈ちや話がないから……」

と、云つた。

慎一は、雅子が歸るまで、咲子を二人の間の楯にすることを忘れなかつた。

六

九月の十五日頃であつた。

慎一は、道男から黒棒の通知を受け取つた。道男の祖母の死を知らして來たのである。

もう八十を越してゐるので、天壽を全うした死であるから、道男一家にとつて、それは悲嘆すべき事ではないだらうが、慎一が道男の幼友達であつた時、このお祖母さまから、いく度もお菓子を貰つたことがあるので、慎一は一晚丈お通夜に行くことにした。

八時頃、顔を出すと、道男の両親や弟妹達も、みんな喜んでくれた。親類や出入の者が、七八十人も集まつてゐる賑かなお通夜で、廣い邸の洋館にも日本間にも、一杯に人が詰めかけてゐた。食物も飲物も、豊富に出てゐて、將棋を指したり碁を打つてゐる連中さへゐた。

雅子も令嬢達の間に立ち交じつてゐて、慎一を見ると、遠くから目禮した。

慎一は、靈前で焼香すると、その部屋で十時近くまで、神妙に坐つてゐたが、少し飽きたので、其處を出ると、廊下づたひに、奥の座敷の方へ行つた。そして、縁側でしばらく立つてゐたが、その芝生の庭は、道男と一しよによく遊んだ彼にとつては、とても思ひ出の深いものだつた。その築山の裏には、遊動圓木や鐵棒などがある筈だつた。彼は、庭下駄を突つかけると、芝生の上へ降りた。

宵闇で月はなかつたが、満天の星は美しく輝いてゐた。

彼が、築山を昇り切つた時、背後に人の足音を感じたと思ふと、駆けつけて來たと見え、息苦しさを苦しさうな聲が、

「瀬川さん……」

と、呼んだ。

「えつー」

慎一は、ギョツとして振り返つた。

「私よ……」

雅子の顔が、三尺と離れない近さまで、迫つてゐた。

「貴女でしたか……びつくりしました……」

「さう……私、先刻から、瀬川さんとお話がしたかつたの……」

「……………」

人目を避けて、こんな所まで、追つて来る！ それは、自分を愛してゐると云ふハッキリした身振であつた。

「私、誰ともお話しする人ないのよ。」

さう云つて、雅子はピッタリ慎一に寄り添つてゐた。

雅子の昂奮した呼吸を聞いてゐると、慎一も息苦しくなつた。

慎一は、自分の氣持を轉換させようとして、ホープに火をつけた。

「妾にも一本頂戴！」

「えつ、貴女煙草お吸ひになるの？」

「え、喫ふの。今夜初て、喫ふの。いけません？」

怒つたやうな口調で、雅子は白い手を差し出した。

「いけませんね。」

「何うして、何うしていけないの？」

何か駄々子のやうに、挑戦的に迫つて來た。それが愛情の擬態でなくつて、何であらう。

友人を裏切るか、自分の感情を抑へるか。それは、慎一にとつて、怖しい一瞬だつた。こんな女性に再び會ふ筈はない。またこんなにまで、女性に心を惹かれることも、人生に二度とはないだらう。

しかし、慎一は、友を裏切りたくはなかつた。相手が、人が良く、自分を信頼し切つてゐる丈に！

「……………」

慎一は、煙草をやる氣はしなかつた。

「つまんないの……」

と、雅子は、鼻を鳴らした。

「何うしてです。貴女なんか、一番楽しい時ぢやないんですか。」

「楽しくないわ。貴方は、私の氣持なんか、ちつとも察して下さらないんですわ。私が、傍へ来るのさへ、嫌さうになさるんですもの……」

「僕が、貴女を嫌ひ……はつく……。……」

慎一は、泣き笑ひのやうに笑つた。

「さう見えるわ。でなきや……」

「雅子さん、貴女は道男君の許婚ぢやありませんか……」

「え、でもそれは、私が何にも知らない時に定まつたことだわ……私は、一人の女性として今度初めて……」

と、云ひかけるのを慎一は、中途で制した。

「そんな事は、云はないで下さい。それは僕を苦しめる文です……僕は……僕は……」

慎一も、終の方は云はなかつた。

「……………」

さすがに雅子もだまつてしまつた。

慎一は、胸に燃え上る激情の焔を、じつと壓へた。

「もう、内へは入りませうか。」

と、慎一は唾をのんだ。

「わッ——」

雅子が、いきなり彼の胸に取りすがつて泣き出した。

慎一は、危く雅子を抱き占めようとした手で、雅子の肩を抑へて、自分から徐々に引き離れた。

「友達を裏切りたくないのです。勘忍して下さいー」

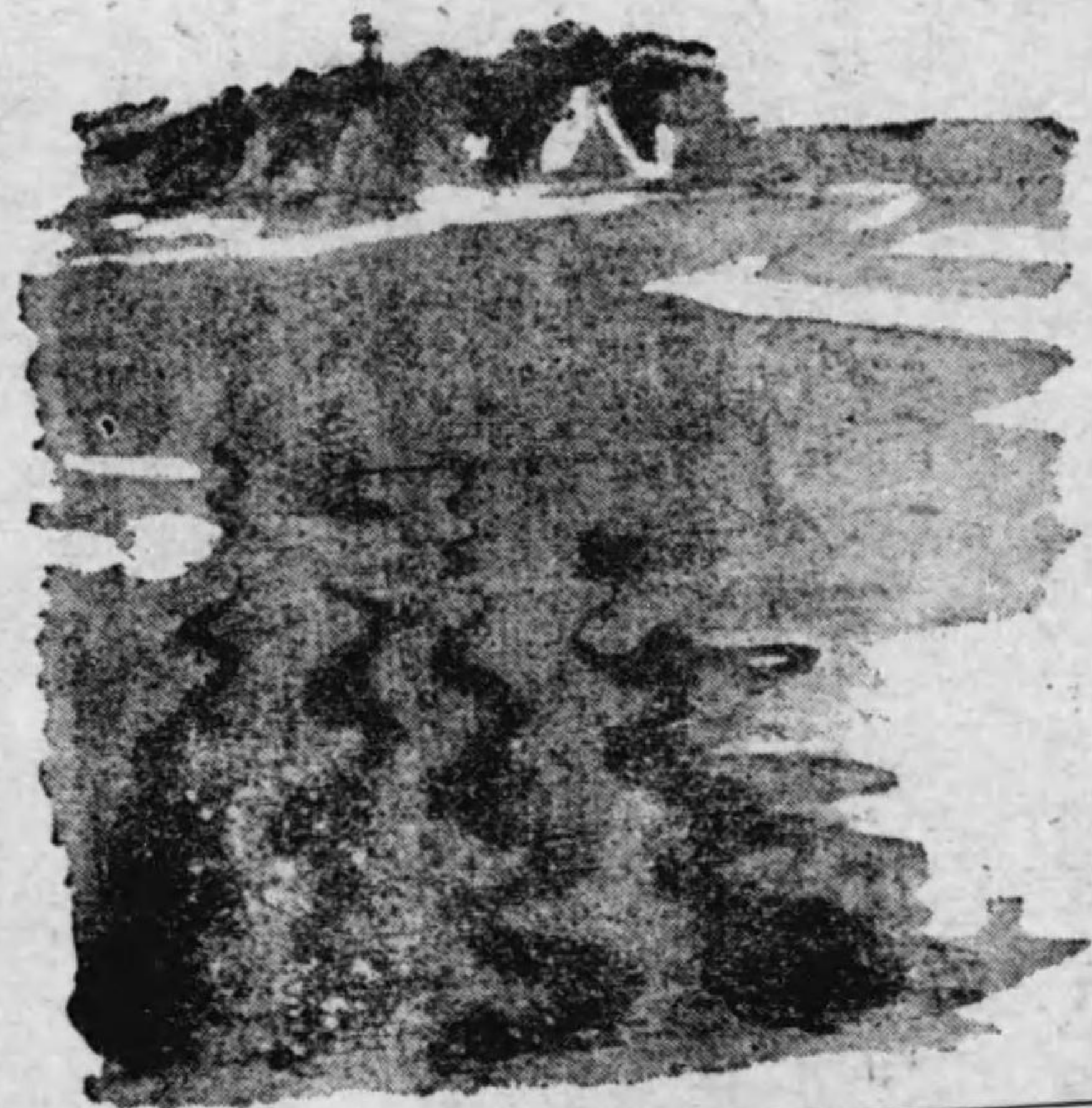
さう云ふと、彼は足早に、芝生を馳け降りた。

慎一が、その晩家に歸つたのは、十一時半頃であつた。

わざ／＼玄關へ迎へに出てくれた母に云つた。

「ねえ、お母さん、僕も結婚しますよ。」

嘘の効果



「誰と……」

母は、キョトンとして云つた。

「お母さんが話してゐる尾崎さんのお嬢さんと……」

「えー？ それは又何と云ふ風の吹き廻しだらう。お見合をしなくつてもいいのかい。」

「向ふは、いゝんでせう。」

「向ふは、お前のことをよく御存じだよ。」

「ぢや、僕はいいです。」

「まあ、尾崎さんも、お嬢さんも、どんなにお喜びになるだらう。」

「……………」

慎一は、それ丈云ふと、せつせと洋服を寝衣に着換へて寢室へは入つた。

人間同志の義理、それを破りたくないために、彼は自分の身體をこの上にも縛つて置きたいと考へたのである。

由比ヶ濱の電車の驛を、海岸の方へ歩ると、砂濱に降りる迄、實に色々な店屋が並んでゐる。たうもろこしを焼いてゐる店、海水浴用品の店、射的屋、キャンデー・ストア、公衆電話の箱、一品料理、犬屋まである。

砂濱になつても、波打際まで、よしず張の茶店に、バラック建の喫茶食事の店、ミルク・スタンド、海の家など、いろ／＼な名稱でズラリと並んでゐる。

七八月の日曜日、この驛ばかりで、一日二萬三萬と云ふ降客があると云ふ、何にしる關東一の海水浴場と云ふべきだから、その濱邊のゴツタ返すやうな賑かさは、一寸形容の言葉がない位だ。月並ながら、玩具箱を、ひつくり返したと云はうか。いや、その程度のものではない。足の踏み入れ場もない混乱だ。雑多な色と形をしたビーチ・パラソル。赤、黄、青、白、いろ／＼な水着を着た少女達、青年、子供、その他。

雑然たる人聲に、潮騒も聞えず、海風も頬を吹かない。ただ、太陽だけは、容赦もなく、照りつゞける丈である。だが、白い波頭を見せて、後から／＼寄せて来る波が、可成高く激し

い。だから、泳ぐのには、それほど適當した海ではなかつた。一昨夜の雷雨で、土用が開け、昨日の海は、殊に波が高かつたが、今日は珍らしく静かであつた。

頭を上げて寄せて来る波の、波頭の立つのは殆んどなく、ダブルダブリと船腹にでも當るやうに、ゆるやかに打ち寄せては、引いて行く。

そよとの風もなく、沖の海は、霧でも白く立ちこめたやうで、夕荒の来る前の静けさであつた。

村田英彦は、澁谷由紀子、雅子の姉妹を乗せて、はるか沖に出てゐた。英彦は、二十八、由紀子は二十一、雅子は十九。三人共、海岸での遊びには、やゝ虚しさを感ずるやうな年頃であつた。

幾夏も、この濱で暮す人達で、人の出盛る眞晝間には、海岸に現はれず、朝か夕暮かに、ヨットを走しらす時もあり、泳ぐ時も、ボートに乗る時も、英彦が、釣道具を持つて来ることもあつた。

ボートを流して、その附近で泳いでゐた英彦は、空が暗くなり、海の底から、湧くやうな風の音を聞くと、凶い時に、海に出たと思つた。

ボートに残つてゐる由紀子に、

「夕立かも知れない。早く歸りませうか。」

と、云ひながら、聲をかけて泳ぎついた。

「雅ちゃん。雅ちゃんー」

と、由紀子も、泳いでゐた妹を呼んだ。上る時ボートが、くつがへらないやうに、雅子は向ふ側に掴まつて、一人づつボートに上つた。

二人が、ボートに上つた時は、もうポツリとく、重みのある雨滴が、三人の肩や頬に、それぞれ當つた。

「これぢや、岸に着くまでに、降られるなあ。」

と、英彦が云つた。

「早く漕ぎませう。夕立が早いから、私達が早いから。」

と、由紀子が云つた。

「よし……」

と、英彦が、座席に坐つてオールを取らうとして、

「オールが、片方しかない。」

と、云つた。

「あらー」

と、由紀子が、聲をあげた。

「流しちやつたんですね。駄目だなア。」

と、英彦は、舟に残つてゐた由紀子を、詰るやうに云つた。

由紀子は、

「知らなかつたんですもの。仕方がないわ。」

と、鼻じるみながら、でもさすがに、心細げに、そのあたりの水面に目をやつたが、影も形もなかつた。

其處へ、胸騒ぎを覚えさせるやうな、一陣の突風が、サツと海面を渡つて來た。

ボートは、不氣味に揺れた。

「仕方がない、僕が手で漕ぎますから、由紀さんはオールでうまく合はせて下さい。」
と、英彦は、たくましい腕で、オール代りに波をかき始めた。

そして、やつと十間も進んだと思ふ内に、空が海に落ちこんで来るやうな凄じい雨が、降つて来た。

ボートには、忽ち水がたまつた。

姉妹は、すぎるやうな眼で英彦を見た。

「大丈夫、直ぐ止む。こんな雨は……」

と、力づけたが、その聲をかき消し、物を云ふと、呼吸のつまるやうな、激しい勢の雨であつた。

英彦は、クロールもうまいし、遠泳も相當で、泳ぎは上手であつたが、こんな所で、二人の女性を抱へて、ボートを捨てるやうな事になれば、生命の不安を感じる。

由紀子も雅子も、泳ぎは相當であつたが、氣弱い女性だから、まさかの時に、役に立つかどうか。英彦としても一人なら、何うにか助けられるが、二人では無理だつた。

その上、雨のせむか、周囲は夜のやうに暗くなつて来た。

英彦は、どん／＼水のは入るボートの中で、何うしていいか分らなくなつて来た。

下から、グンと突き上げられたやうに感じた途端、あつと云ふ間に、三人とも波の上に投げ

出されてしまつた。

三人とも、波の上に直ぐ頭だけを出した。

姉妹は、二人ともうぜんかづらの花のやうなオレンジ色の海水着に、白い海水帽を被ぶつてゐた。

英彦は、すぐボートが底を見せ漂つてゐるのに泳ぎついた。白い帽子の一つも、すぐ泳ぎついた。

が、もう一つの白い帽子は、ボートから三間位離れた所で見る間に波間に、沈みかけようとしてゐる。英彦は、それを見ると、彼はボートを捨て、クロールで、忽ち泳ぎつき、巧みに相手の背後に出ると、海水着の背中の中の十文字に手をかけると、引き寄せて、

「しつかりなさい！」

と、叫びながら、相手をさへへて立身で泳いだ。大きなうねりが来て、ボートとの間が、大分引き離された。

彼は、必死に泳ぎながら、やつとボートの所へ来て、相手をボートにとりすがらせた。それからは、殆んど夢中だつた。何分位たつたか分らなかつた。

ボート屋で、澁谷姉妹の乗ったボートが、歸らないのに気がつき、幾隻もの搜索船を出してくれた。

その一つに、彼等は救はれたのであつた。

二

稲村ヶ崎の海岸添に、ギツシリと建てこんだ別荘の一群の中に、由紀子姉妹の家も、英彦の家もあつた。

英彦の伯父は、有名な外交官であつた。よすときは、米國大使をしてゐた。

隠退して以來、鎌倉に住み、夏は輕井澤に避暑に行くので、夏は甥の英彦が、避暑旁々留守居に来るのであつた。

英彦は、どんな集りにでも目に立つ清麗な風貌をした秀才であつた。外交官の試験が通つて外務省に勤めてゐた。

英彦の伯父の家は、生垣に圍まれた三百坪ばかりの日本風の邸宅だつたが、由紀子姉妹の家は敷地は狭かつたが、洋風のモダンな別荘であつた。

姉妹の父は成功した辯護士で、巨萬の富を積んでゐた。母を早く亡くした姉妹は、祖母に監督されてゐた。

鎌倉の家にも、父は滅多に來なかつた。

英彦と姉妹とは、三四年以來の交際である。

姉妹も、英彦が好きだつたが、姉妹の祖母も英彦が大の氣に入りで、姉妹のどちらかを、英彦に貰つてもらひたい希望があつた。

英彦も、姉妹をどちらも好いてゐた。殊に、英彦の實家は貧しく、學生時代から學費を出して貰つた伯父の家も、死んだ伯母が、豪華な生活をしたために、相當な負債を背負つてゐた。

外交官としての生活には、物質的な内助の出来る妻の方が、好もしかつた。そんな意味でも英彦は姉妹のどちらかと結婚してもいゝと思つてゐた。

たゞ、その選擇がなか／＼難しかつた。姉は、女子大を出て居た。妹は女學校だけだつたが素直で靜かで、捨てがたい所があつた。

由紀子は、美人であつた。美しい人に特有な氣品と、明るい性格が、人を惹きつけた。妹は、目立たない顔であつたが、桔梗の花に見るやうな靜かな美しさがあつた。

英彦は、どちらも好きであつた。が、まだどちらに對しても、戀愛的な氣持にはなつてゐなかつた。

さうした三人の交際が、今年も續いてゐる内に、あのボート轉覆事件が起つたのである。

三

食後の人達は、月光が水のやうに流れるヴェランダの藤椅子に坐つてゐた。姉妹の遭難を知つた姉妹の父が、あわてゝかけつけて、英彦のために感謝の小宴を催したのである。

英彦は、始終言葉少なであつた。彼は、姉妹の父から、命の恩人扱ひされてゐたが、あの出來事自身が、彼としても輕卒の責を負はなければならぬやうな氣がするのである。

幸ひ、救助船が早く來たゝめ、助かつたやうなものゝ、あのまゝ二、三時間も過ぎたら、姉妹は二人とも、少くもその一人は殺してしまつたかも知れない。

さうなると、今感謝されてゐる姉妹の父に、何と云つて云ひわけをしたらいゝだらうか。さう考へると、彼には、あの事件が苦しい思出にさへなり得るのである。」

由紀子は、たゞ一人はしやいでゐた。

姉妹とも今宵は、絹紅梅の浴衣に、えんじ色の單衣帯を締めてゐたが、月明りの中で見ると、殊に美しかつた。

「村田さんだつたから、姉妹とも助かつたんだなあ……」

と、姉妹の父は、いく度も同じ事を云つた。

「いや、搜索船を早く出してくれたからですよ。」

と、英彦は云つた。

「いゝえ。村田さんが居なかつたら、私丈は死んでゐるわ。」

と、由紀子が云つた。

「オールがあれば、あんな事はないんですが……」

と、英彦が云ふと、

「私の故だと云ふんでせう。」

と、由紀子が云つた。

「さうですよ。」

と、英彦は笑つた。

「オイルを失くした上に、溺れかけた所を、ボートにつかまらして頂いたり——」

「由紀子さんでしたかなア。僕が泳いで行つて助けたのは——」

「さうよ。」

由紀子は、ハッキリ云つた。

「ふーむ——」

何しろ、既に夜であつたし、猛烈な雨で、どちらが姉だか妹だか分らなかつた。しかし、英彦は、何となく妹の方だと感じてゐたが、まだ確めて居なかつたのだ。

「僕は、雅子さんだと思つてゐたのですよ……」

と、雅子の方を見たが、雅子は無表情に月を見てゐた。

そして、しばらくしてから、何気なく、

「いゝお月様ね。」

と、云つた。

「本當に、村田さんは、命の恩人ですわ。いつも、御親切にして頂く上に……」

と、祖母が云つた。

父も嬉しさうに、

「村田さん、こゝのお祖母さんは、貴君が、大變なひいきですよ。東京へ來ても、貴君のお噂ばかりしてゐますよ。ハ、ハ、ハ。」

と、云つた。

しばらくして、奥へひつこんだ祖母が、奥から姉妹を用ありげに呼んだ。

後には、英彦と姉妹の父とだけになつた。

それは、最初からの手筈のやうに見えた。

二人ぎりになると、姉妹の父は早速口を切つた。

「いやア。村田さん、今度は、大變な御恩を受けましたよ。祖母も姉妹も、心から感謝してゐますよ。それについて、お願ひがあるんですが、決してこんな事件があつたから、お願ひするわけではないんですが、如何でせう。姉妹の内、どちらかを貰つて頂けないでせうか。年の順から云ひましても、由紀子の方なら、此方も都合なのですが、……今度も由紀子の方が、ひどくお世話をやかしたやうで、當人も命の恩人だと云つてゐますよ。如何でせうか。……一つ

お考へ下さつては……」

それは、英彦も姉妹の祖母から、それとなく話されてゐる問題だつた。こんな事件のため話が促進され公式化されたに過ぎないのであつた。

「はあ。僕も考へてゐないことは、ありません。たゞ、由紀子さんも雅子さんも、両方とも僕は好きなもんですから……」

と、英彦も、遠慮なく云つた。

「なるほど……。しかし、今度の事件などでも、由紀子の方が、より以上に、お世話をやかしたとすると、由紀子と御縁があるのではないでせうか。父親としては、どちらでもいゝんです……姉妹に持たせて嫁つかせる物も、同じだけにしてやるつもりですが……しかし、由紀子の方は、よつほど張り切つてゐるやうですが……」

姉妹の父も、打ちとけて來た。

「とにかく、御姉妹の方のどちらかを頂くことだけは、お約束します。また、多分由紀子さんの方を頂くことにしますが、確答は少し待つて頂きたいんですが……」

と、英彦は云つた。

「それは、どうぞ。伯父さんなどの御相談もおありになることでせうから、どうぞよくお考へ下さつて……」

話は、それで一應了つた。姉妹は、すぐまた現はれて來た。そして、夜の更けると共に、いろいろな話のはずんだ。

四

ボートの事があつてから、何となく海が厭はしいものに感ぜられ、英彦はあまり海に行かなかつた。姉妹も同じ心か、夕方海岸を散歩するだけで、海へは入らうとはしなかつた。

八月も終に近づいて、海岸にも海藻が多く、水もつめたくなり、ゴミが多く泳ぎの人も少くなつた。

朝夕庭に來る朝鮮雉と云ふ鳥の聲や、オシイヨス、オシイヨス——と云ふ蟬の聲が、夏の去るのを惜しむ心を、人に感じさせる頃になつた。

その日は、また盛夏に後戻りしたのかと思はせるやうな暑い日だつた。今日あたり、今年の名残りに、一泳ぎしたいなアと英彦が思つてゐると、隣から、

「村田さんー」と、呼ぶ雅子の聲がした。

窓から見ると、海水着を着た雅子が、水精のやうな恰好で、芝生の上に足を投げ出してゐた。

英彦が、二階の窓から笑ひながら見降すと、

「お姉さんが、表からお誘ひに行つたのよ。早く海水着を、お召しなさい。」と云つた。

「え、泳ぎませう。お名残ですね。」

さう云ふと、英彦はすぐ支度にかゝつた。

英彦が、支度をしてゐると、

「由紀子さまが……」と、女中が取り次いで來た。

三人揃つて海岸へ降り乍ら、英彦は思ひがけない発見をした。

事件以來、姉妹の海水着の姿を見たことがないし、また事件以前は、ちつとも注意してゐなかつたが、自分の前に立つて歩く姉妹の姿を見てゐると、英彦は（おや！）と、思つた。

やゝかたい白桃のやうな雅子の背には、海水着がオレンジ色の十文字を描いてゐたが、由紀子は、背中一面を掩ふ海水着を着てゐる。

あの日、あの必死のとき、彼の指にしつかりと觸れたのは、十文字の海水着であつた。

自分も、濡れかゝつたのを助けたのは雅子だと思つてゐたが、やはり由紀子ではなかつたのだ。

それなのに、なぜ由紀子は、自分が助けられたやうに云ふのであらうか。

彼は、何か騙されてゐるやうに嫌だつた。海には入ると、英彦は故意に、雅子について泳ぎ廻つた。

「雅子さんー」

彼は、訊いた。

「貴女は、あのボートに乗つた日も、その水着ですか。」

「え、さうよ。いつも、この水着よ。」

雅子は、無心に答へた。

「ちや、僕が、ボートを離れて、助けに行つたのは貴女ぢやありませんか。」

「……………」

「さうでせう。」

飛沫に濡れてゐる雅子の顔は泣き笑ふやうな表情になつた。

「何故、お姉さんだといふことになつたのです。」

「そんな事知らないわ。」

「何故です？」

英彦は、重ねて訊いた。

「お姉さんの方が、救つて頂きたかつたのだわ……」

「ちや、貴女は僕に救はれるのは、迷惑だつたのですか……」

「あらいやだ。私こそ……」

と、云ひかけたが、うねりが来て皆まで云はせなかつた。

うねりが去ると、雅子はつゞけたが、もう外のことを云つた。

「ボートが覆つたとき、私は足を打つて泳げなくなつたの……死ぬかも知れないと思つたわ。

そこへ、貴君が猛然と来て下さつたの……」

「ちや、お姉さんは、何うしてあんなことを云ふんでせう。」

「だつて、お姉さんも、私より先きに助けて頂いたのぢやないの。」

「いや。お姉さんは、最初から、ボートに取付いてゐたのです。」

「さう。私は、お姉さんも濡れかけて、助けて頂いたのかと思つてゐたの。それに、お姉さんは、助けて貰つたのは、自分一人のやうに、おつしやるから、私はだまつてゐたの……」

「嘘は嫌だなア。」

英彦は、ハツキリ云つた。

「嘘でもないわ。お姉さんだつて、助けて頂いたんだわ。お姉さんだつて、貴君を命の恩人と

云ふ権利はあるわ。」

さう云ふと雅子は、クスリと笑つて、彼を避けるやうに、グン／＼と泳ぎ出した。

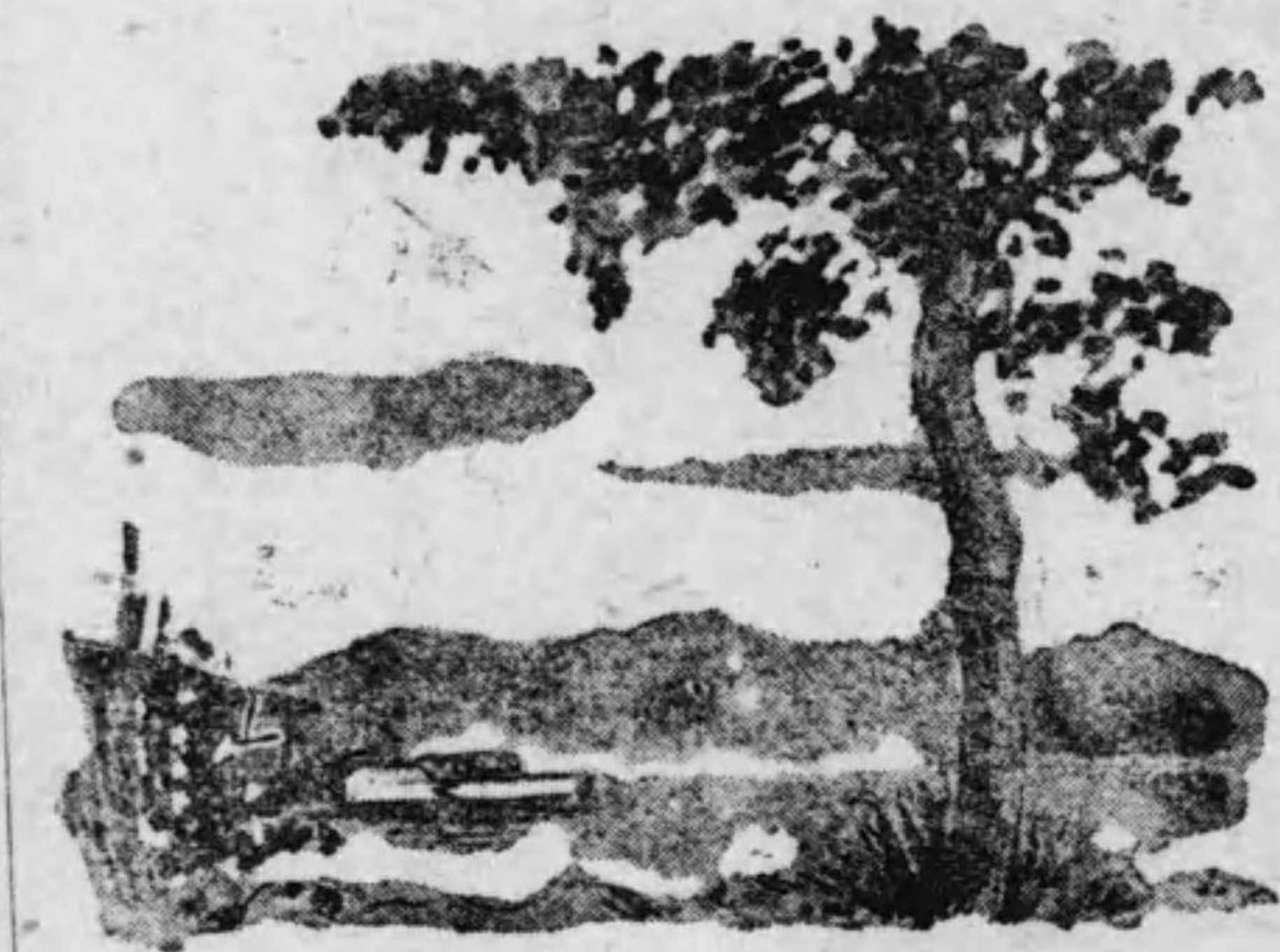
英彦は、雅子の素直な、こだはりない性格に、激しい愛着を感じた。この人こそといふ強い魅力を感じた。

彼は、彼女が濡れかけた時と同じやうに、勢猛に泳ぎ寄ると、

「雅子さん。貴女のお父さんは、命を救はれたのが、縁だと云つて下さいましたよ。僕は、恩や義理で、結婚するのは、いやですよ。僕は、貴女を愛してゐるのです。」

海の中で、英彦はあまりに、眞面目になりすぎた。

見合結婚是非



雅子の表情は、氣の毒なほど崩れてしまった。

彼は、その夜東京に居る姉妹の父と、輕井澤にゐる伯父とに手紙を書いた。姉妹の父に書いた文句の一節は、かう書かれてゐた。

由紀子さんもたしかにお助け致しました。しかし、僕が、生命を賭してお助けしたのは、雅子さんの方でした。その意味で、あの時、我々の死生は一瞬間海中で結びついてゐたのです。その結合を、生涯に延長することは、貴下のお言葉通り雅子さんと私との御縁かと存ぜられま
す……。

熱海から乗った箱根行きの乗合自動車は、海拔八百メートル近くの十國峠の、坦々たる舗装路を、ジュンジュン軽快な音を立てて走つてゐた。

山隈を一つ廻る毎に、遠州、駿河あたりの山々が次ぎ／＼に、八月中旬の紺青の空の下に、重なつたり離れたりして、雄大な眺望を展開するのであつた。

後の方の座席に腰かけてゐた白井良一の憂鬱だつた心の翳も、この美しいパノラマに、一時的にしろ吹き消されてゐた。

五尺六七寸のスラリとした身體に、ピツタリ合つた灰色のサツクコートを着て、荷物は小さなストケースに、ステッキだけといふ身軽さであつた。

外から見れば、青年紳士の氣がるな週末旅行と見られるであらうが、事實はその反対で、彼は重くしい用事を持つて箱根へ行くのであつた。

夏の休暇を貰つて、熱海の友人の家へ遊びに行つてゐた良一に、父から電話がかゝり、例の縁談の見合を、二十四日の日曜の午後五時に、宮の下の富士屋ホテルで、やることにしたから

間違ひなく箱根へ来いといふ命令だつた。

後備の海軍中將である良一の父は、父一人息子一人の良一を愛してゐてくれたが、頑固な軍人氣質から、良一を、とかく自分の思ひ通りにしたがつてゐるのであつた。今度の縁談なども父が舊友の娘だといふ相手を、自分一人で撰定して、良一に押しつけてゐるのである。

父が、良一の結婚を急ぐ理由は、五年前に老妻を亡くした淋しい家庭に、早く良一の妻を迎へて、孫の顔でも見たいといふ希望と、歐洲大戰當時巴里の大使館附武官であつたとき、親交を結んだ三井物産の支店員が、その後ロンドンの支店長に出世してゐたのが、今春歸朝したのとヒョッコリ邂逅し、すつかり舊交を温めた上、父が財政的に窮迫してゐるのを見兼ねて、相手が相當の金を融通してくれたので、すつかり感激し、是が非でも、その娘を良一の嫁に貰はうと決心してゐるのであつた。

近代青年である良一は、見合結婚など、凡そ自分と縁遠いものに考へられたが、と云つて父に強硬に反対するほど、外に戀愛の相手があるといふわけでもないで、苦笑しながらも、結局父の云ふ通りに行動する外はなかつた。

この話は、今年良一が帝大の工科を出て、重工業の會社に就職した時からの話であつたが、

相手が大阪に住んでゐる文に、何かと口實をつけて、引き延ばしてゐたのである。

だから、良一は、相手の名前も知らなかつたし、どんな性質のお嬢さんであるかさへ知らなかつた。たゞ、幼年時代は父と一しよにフランスに居て、十四の時女學校には入るために、母親と一しよに日本へ歸つたといふ事だけ、知つてゐた。

昨夜電話で、父に箱根へ来いと云はれた時、良一は云つた。

「何うして、箱根へなんか、僕を呼び出すんです？」

「うん。あゝいふ山紫水明の地で見合をすると、きつと相手が綺麗に見えるだらう。あはゝゝゝ。」

父は、電話口で大聲を出した。

「だつて、お父さん。美しい風景と比べたら、どんな美しい娘さんでも、汚く見えるかも知れませんよ。」

と、良一も冗談半分に抗議した。

「いや、どんな風景にも負けない位の美人ぢや。心配せんでよい。いゝか。日曜の午後五時だよ。向ふも、その日に来るさうだ。わしも、その日に行つてゐる。お前も、間違つたらいかんぞ。」

父は、さう云つて電話を切つた。

どうせ、箱根へ行かなければならぬとしたら、この頃開かれた十國峠の風光を賞して、蘆の湖の湖畔で、一、二日宿りたいやうな氣になつて、良一は今朝熱海を立つて来たのである。

十國峠のドライブ・ウェイは、彼が想像したより、遙かに雄大だつた。盗人厩といふ不思議な名前の所へ来た時、もう蘆の湖まで近いと聞いて、バスを降りた。風光を賞しながら蘆の湖迄歩いて行きたくなつたのである。

眞夏であつたが、峰から峰へ渡る涼風に、汗一つ出なかつた。

暫く歩いてから道に添つた小高い丘の上に登つて、仰向けになつて休憩した。

ふと、自動車のエンヂンの音がきこえたので、身體を起して見ると、やゝ小型のロードスターが熱海の方から走つて来た。

そして、良一の休んでゐる丘の麓まで来ると、急に速度がゆるんで車が止まると、白いスポーツ服を着た斷髪の少女と、その弟らしい十一、二の少年が降りて来た。

自動車の中には、両親らしい老夫婦が乗つてゐたが降りようとはしなかつた。

ライカらしいカメラを持った少女は、勢よく良一のゐる丘へ上つて来たが、良一の居るのに気がつくのと、ハツとして立ち止まつた。花の蕾を思はせるやうな新鮮な顔だつた。心持ち汗ばんでゐるが、ほんのりと櫻色を浮べた頬や、濃い眉の下の物怖ぢしない瞳は、世の中の凡てのもの、金銭とか戀愛とか、そんなものに、少しも汚されたことのない少女のまゝの純潔を示した美しさであつた。

令嬢は、良一を避けるやうに、良一とは五間ばかり離れた中腹に止まつて、後から来る弟をさし兼ねいた。

背丈も、五尺三寸はあるらしく、羚鹿のやうに、すんなりとした脚だつた。

令嬢はビントを合はせると、三、四枚寫眞を映した。

「お姉さま。箱根の山の雲助つて、何處にゐたの。」

弟が、大きい聲で訊いてゐる。

令嬢が何か答へたらしいが、少年は、満足せぬらしく、

「えゝ？ えゝ？？」

何度も訊き返してゐる。

良一は、何と云ふ事なく微笑を持つて、この姉弟を見てゐると、姉は、

「さあ、行きませう。」

と云ふと、サツサと先きに立つて、丘を駈け降りてしまつた。

すぐ、自動車は動き出して、その山陰にかくれると、しばらくして向ふの山腹に現はれたときは、令嬢の白い上着だけが、その水色に塗つた車體に、浮き立つやうに見えた。

良一も、その車を追ふやうに立ち上つて、丘を降りかけると、先刻令嬢の立つてゐたあたりに、繊細なレースのぬひ取りをした小さなハンカチが落ちてゐた。

手に取ると、甘美な香水の匂ひが鼻を衝いた。

片隅に、ヒロミと片假名で、縫ひ取つてあつた。

もう一度目を上げると、彼等の自動車は、今度はやゝ低い山の峰を傳ふ道を、玩具のやうに走しつゝゐた。

二

その夜、蘆の湖畔の宿に止まつた青年は、夕食を済ませると宿の浴衣を着て、ステッキを持

つて散歩に出た。

八時近かつたが、山上の街はまだ夜にはなり切つてゐなかつた。散歩する避暑客で、賑かであつた。

元箱根の方へ歩いて行つた。左側は、湖の美しい水が、足許近くまで、ヒタヒタと寄せてゐた。

湖の上を滑るモーターボートを見ながら歩いてゐると、

「姉さん、一寸来て御覧よ。變な動物があるよ。」

何だか聞き覚えのある少年の聲がした。思はず、立ち止まると、右側の土産物を買る店の店先に、先刻の少年が足許をのぞきながら、そのまゝ行き過ぎようとする姉を呼んでゐる。

先刻の令嬢は、濃い藍の大膽な浴衣を、何氣なく着こなして、博多帯をしめてゐたが、洋服姿とはまた違つて、女らしい魅力が感ぜられた。

「ねえ、變な動物でせう。やもりにも似てゐるでせう。おたまじやくしにも似てゐるし、何だらう？」

弟の間に、姉は面倒くささうに引き返して来て、そのたらひをのぞくと、

「山椒魚よ……」

と、たつた一言云つたが、良一にはその聲が、實に美しくきこえた。

「ふうーん。サンセウウヲつて、こんな變な形をしてゐても、やつぱりお魚なの……」

「……………」

姉は、だまつてゐた。

「ね、ウヲつて云ふからお魚なの？」

弟は、この年頃の少年にありがちな、執拗さで姉を困らしてゐた。

「知らないわ。さア進さん、行きませう。」

と、姉は弟を促して歩き出したが、弟はまだ山椒魚に未練があるらしく、その怪奇な姿を見つめてゐる。

弟に知らない事を訊かれたので、すぐ腹を立てた令嬢のわが儘らしい性格が、良一には却つて親しく感ぜられた。

良一も、好奇心が動いて、山椒魚をのぞきに行つた。小さい山椒魚が、たらひの中の清い水の中に、じつと動かすにゐた。

人なつこい少年は、良一が一しよに見始めた事を喜んだらしく、

「眼が、あんなところにあらア。」

と、一人言のやうに云つてゐたが、すぐ、

「ね、小父さん、山椒魚つて、お魚なの？」

と、先刻からの疑問を訊いた。

良一は、少年の姉に似たつぶらな瞳に微笑をもらしながら、

「兩棲動物ぢやありませんか。蛙や水にゐるのもりと同じぢやないでせうか。」

と云ふと、少年はわが意を得たりといふ風に背いて、

「さうですね。きつとさうですね。ありがたう！」

と云ふと、その新知識を姉に報告すべく、二三十間も行きすぎてゐる姉の後を追つて、走り出した。

良一も、その方向へ歩いてゐたのだから、二人の後から、何か胸のふくれる思ひで、やゝ急

ぎ足に歩いた。

少年は姉に追いつくと、高聲で、

「山椒魚つて、お魚ぢやないつて。兩棲動物だつて！」

と、云つてゐるのが聞えた。

「えつー！」

と、弟に一本やられた姉は、瞬間、弟をふり返つた。小聲で、二言三言問答したらしい姉弟

は、一しよに後を振り返つた。弟の方は、良一の顔を見て親しさを笑つたが、姉は冷たい瞥

をくれた丈であつた。

しかし、良一は、その美しい娘に存在を知られた丈でも、嬉しかつた。

静かな夕暮の湖畔の道で、少年の聲が又高く響いて來た。

「あんな動物がゐるのだつたら、蘆の湖でなんか泳げないね。あれの親が、きつとゐるよ。あ

した早く富士屋ホテルへ行かうよ。あすこにはプールがあるんだつてね。」

それに答へる姉の聲は聞えず、再び少年の透きとほる聲がきこえて來た。

「ぢや明日起きたら、すぐ行かうね。」

良一も、豫定を一日くりあげて、明日富士屋ホテルへ行かうと思つた。

翌日、良一が元箱根から遊覧船のモーターボートに乗つて蘆の湖を横切るとき、又同じ姉弟と乗り合はした。

彼がモーターボートの發着所へ行くと、既にエンジンのかゝつた船の座席に、頭にチョコンと乗つたやうな可愛いボンネットをかぶつた少女が、向ふ向きにかけてゐた、昨日の少年が、姉に何か話しかけてゐた。

良一を見ると、少年は親しみのある微笑で迎へた。姉も良一を見ると、度々の偶然に、少し可笑しくなつたと見えて、一寸微笑に似たものを口元に浮べた。朝が早いせゐか乗客は、五人しか乗つてゐなかつた。

ボートが岸を放れると、湖の上はかなりの強い風だつた。

案内ガールの説明も、風に千切られて聞えたり、聞えなかつたりした。

波が、舟べりに強くはね返つてゐた。

富士が、くつきりと美しい姿を見せてゐたが、波があるので名物の「倒さ富士」は見えなかつた。

つた。

突然船が大きく揺れ、ハツとした瞬間バサツと波頭が、甲板を洗ひ、足を上げようとしたが、良一も妹弟も靴を濡らされてしまつた。

「やあ、ひどい！」

と、良一が苦笑すると、少女も同病相憐むといふやうに、良一に笑ひかけた。それで、二人の間を、へだてゝゐたものが除れた。

「今日は、貴女方丈ですか。」

「え、父と母とは自動車で先きへ参りましたの。弟が、モーターボートに乗ると云つて、きかないものですから。どうも、やんちゃで私達の云ふことをきけませんの……」

良一も笑つたが、昨日の山椒魚のことで皮肉を云はれてゐるやうな氣がした。

湖尻へ着いたときは、可なり親しく口が利けるやうになつてゐた。

大湧谷も、一しよに見物した。

良一は、弟の手を引いて、岩の上を歩いた。

弟を安全な場所に、先づ連れて行つてから、引き離して姉に手を貸さうとすると、

「大丈夫よ。」

と、危なげのない大膽な足取りで崖の端近くまで行つた。すぐ、その下の岩の間からも、悪臭のある煙が噴き出してゐた。

「地球が、ブツ／＼云つてるやうね。」

と、少女は良一を呼んで聞かせた。

「地球にも不平があるんですね。」

と、良一が云つた。

「妾にもあるわ。」

と、少女が云つた。

「貴女に、へえ。貴女のやうに、日本中で一番幸福に見える方にどんな不平があるんです？」

「貴君はないの？」

少女は、自分に課せられた問には答へず、良一に訊き返した。

「僕は、大いに在ります。第一、今度箱根へ来たことが、たまたま不平なんです。」

「私だつて、箱根なんかつまらないわ。」

「何うしてですか？」

と、良一が訊いたとき、弟の少年が、

「姉さま、早く行きませう。こんなくさいところ僕嫌ひだよ……お姉さま。」

と、大きい聲でさわぎ出した。

四

朝早く目がさめてしまつた。明日、いやもう今日になつたが——今日の五時に、父に連れられて来る得體の知れぬ娘と見合をすることを考へると、良一は憂鬱だつた。

それも、あの素晴らしい少女を知らない前ならば、父に對する犠牲的精神の發露として、父の最後の希望を充たすために、案外氣輕に見合をして、よく／＼氣に入らなかつたら斷るし、相手に少しでも好意が持てたら結婚してもいゝと考へてゐたのだが——あの少女と知り合つて見ると、昨夜も二時間ばかり一しよに散歩をしたが、——明朗な近代的性格が、たまたま好ましく思はれて來るのであつた。

見合を控へてゐる丈に、良一は慎んで相手の身分や素性について何もきかなかつたし、相

手も遠慮して、良一については何もきかなかつた。しかし、お互の會話の中に出て来る教養や趣味は、お互ひに尊敬し得るものであつた。今日も、午後から二人で強羅公園へ行くことを約束したのであつた。

良一は、それを自分の青春のせめてもの名残りとしたかつたのだ。

約束の午後一時に、電車の驛で待つてゐたが、少女は三十分近く遅れて來た。

「弟がうるさくつきまといつて、出られませんでしたの。今やつと晝寝をしたから逃げ出して來ましたの……」

電車の中も強羅へついてからも、二人は楽しかつた。

相模灣の波濤が、ほのじろく見える高臺の涼しい樹陰で、二人はいつまでも話し込んでしまつた。

「僕は、今日限り貴女とお交際出来ないかも知れません！」

と、良一は悲しみをこめて云つた。

「私も、さうよ。……でも、貴君は何故？……」

「理由は聞かないで下さい。貴女とは本當に短い間だつた。たつた三日の交際ですなア。で

も、僕は楽しかつた。恐らく、一生忘れないだらうと思ひます。」

良一の眼が、抑へられた情熱に輝いた。

「いゝわ。いゝわ。お互に、センチになるのよしませう。何もおつしやらないで！ 私達の交

際は、三日間の運命だつたのよ。貴君にお目にかゝるのが分つてゐたら、私考へ様があつたんだわ！」

「それは、何う云ふことですか……」

「これ以上、訊かないで下さい。」

寂しく笑つて、向ふを向いた相手の白い頸を見て居ると、良一は父の頑固な干渉がにくらしくさへなつた。

「私、貴君ともう一月早くお目にかゝればよかつたんだわ。」

相手に云はれると、良一も、

「僕も、さうだつたのです。僕も……」

と興奮してゐた。

が、相手は、それ以上、何も云はなかつた。

良一は、しばらくして、

「僕、實は初めて十國峠の途中で、貴女にお逢ひした時、貴女のハンカチを拾つたのです。その後、お返しするつもりでゐたのですが、つい出しそびれてゐたのです。が、これぎり、貴女にお目にかゝれないとすると、これでも記念に頂いて置きたいと思ひます。」

と云ひながら、此間拾つたハンカチを取り出した。

相手は、これを一瞥すると、

「ハンカチを貰ふと、別れると云ひますわねえ。私達は、たゞ別れるために會つたやうなものですわ。」

と、悲しげに眼を伏せた。

五

富士屋ホテルのテレーズで、籐の卓子を挟んで、二人の老紳士が、ビールの杯を揚げながら、談笑してゐた。遠慮のない間柄と見え、時々腹の底から笑ひ合つた。

「一九一六年の五月かな、君と初めて會つたのは……」

「六月ぢやないかな……」

「あの頃の巴里を考へると、今の日本なんかありがたいな……君と初めて會つた晩は、ツエツペリンの空襲があつた晩ぢやないか……」

「さうかも知れん——砂糖がなくて、サツカリンだつたし、バターもなくなつてゐたね……」

「しかし、酒丈は不自由しなかつたなア、お互ひに随分飲んだものだね。あはムムム」

「あはムムム」

一人は、背が低くかつたが巨眼角顔で、多年大洋の潮風にやけたためだらう、ピカ／＼と底光りがしてゐた。一人は、細面の華奢な顔で、もうすつかり白くなつた髪を、七三にきれいに分けてゐた。

角顔の老人は、ビールをグツと飲みほすと、大きい腕時計を見て、

「もう六時十五分だな。良一の奴、何うしたのだらう。ポイーに訊くと、一時頃に出て行つたと云ふんだが……」

「まあ、いゝでせう。わしのとこの弘美も、先刻一寸お友達の別荘へ行つたんだが、歸つて來れば、すぐ此方へよこせと云つて置いたんだが……」

「今時の若い奴は、のんきですなア。親が心配してゐるほど、自分自身のことを心配せん！」
「同感ですなア。弘美なども、大切なお見合だから、外へなんか出ないで部屋にゐると云つたんだが、云ふことを聞かん！」

「あはゝゝゝゝ」

「あはゝゝゝゝ」

二人は、またビールを三四杯づゝ重ねた。

時計は、六時半になつてゐた。

「ボーイさん。」

角顔の老人がボーイを呼んだ。

「三十五番へ行つて、僕の息子が歸つて來てゐるか何うか、一寸見てくれんか……」
「は。S。」

と、ボーイが行きかゝるのを、細面の老人が呼び止めた。

「ついでに、十四番へ廻つてね。奥さんに、娘は何うしたと訊いて來てくれないか。」
「かしこまりました。」

ボーイが去ると、二人の老人は又、ビールの杯を重ねた。

「少し心配だなア。」

角顔の老人が云つた。

「全く。もう七時になつたなア。」

細面の老人も、一寸眉をひそめた。

「見合なんて事は、今時の若い者には、向かないのかな。」

細面の老人は、相手の杯に、ビールを注いでやりながら、

「僕達の計畫は、失敗だつたかも知れないなア。」

「うむ。」

と、角顔の老人が、うなつた時だつた。彼等の待ちかねてゐた青年と少女は、もう十年の知合のやうに、手を取り合はんばかりにして、ホテルの玄関からホールを横ぎつて、テレースに現れた。逸早く二人の姿を見た角顔の老人は、愕いて立ち上ると、口を開けたまゝ、二人を睨みつけてゐた。

「何だ、弘美……お前は、もう良一君を知つてゐたのか……」

勝 利 の 後



細面の老人も呆氣にとられてゐると、少女はサツと青年の傍を離れ、父の胸に顔を寄せると
「いけないの？ お父さま。」
と、嬉しげに甘えた。
「いゝんだよ。悪いわけはないんだが、あはゝゝ。何うもいかん。今時の若い者には敵はん。
なあ、白井君……」
と、老友の顔を見た。
さう云はれた緒顔の老將軍も、相好を崩しながら、
「あはゝゝ、あはゝゝ……」
泣き笑ひのやうに、笑つてゐた。

「だが、エルテルが死ななければならなかつた氣持は、僕にはよく分るのです。」

平素は無口な秦が、音楽や文學や、いやそれ以上に、人間の魂について語る時には、忽ち人間が變つたやうに、情熱的な口調になるのであつた。エルテルとは、ゲーテの名作「エルテルの悲しみ」の主人公で、相手を純愛するあまり自殺してしまふ青年である。

朱實は、そんな話をする時の秦の情熱に溢れた眼付は、好きであつた。

二人の脚をおろした崖下には、眞夏の太陽を照り返した潮が、ひた／＼寄せてゐた。

返子の浪子不動の直ぐ近くで、左に延びる砂濱には、こつた返す海水着の人々や、ビーチ・パラソルで、まるで繪具箱をぶちまけたやうな、原色の華やかさが、目まぐるしく動いてゐた。

朱實は、こんな場合、いつも素直に聽いてゐた。文學上、思想上の興味ある知識や學問なども初めて教へられる場合も多かつたし、何か大きな精神的な世界へ、小柄な身體の秦が、身もたえしながら、戦ひを挑んで行くやうな容子も、一つの魅惑であつた。

「私、「エルテルの悲しみ」つて讀んだことないのよ。今度讀んで見るわ。」

白い夏のスポーツ服の膝を両手で抱いたまゝ、晴れた日には、伊豆の天城がよく見える沖の方を見ながら、朱實は小さい聲で云つた。

そして（秦は、私を愛してゐるのかも知れない！）と、心の中でふと考へた。

浴衣の袂から、ハンカチを出して、額の汗を拭つてゐた秦は、

「えゝぜひ、一つ讀んで下さい……。」

と云つて、再び話を続けようとする時だつた。

一寸振り返つた朱實は、

「あら失禮な人だわー」

と、小さなしかし憤つた聲で云つて、いきなり、サツと立ち上つた。

秦が、その方を見ると、白い袖無しの上着に白いズボン穿いた長身の、顔は陽に焼けた立派な體格の青年が、三四間先の樹の陰から、今それで撮影したばかりの寫眞機をしまひながら、ニヤ／＼笑ひながら出て來た。

「黙つて撮つた上に、づう／＼しいわ。」

と、朱實が睨みつけるので、秦もクワツとして、その方を見た。自分はともかく、朱實に對して、この上もない冒瀆をされたやうな氣がして、許すまじき氣持だつた。

すると、相手は、いかにも物馴れたスポーツマンらしい容子で、大跨に近づいて來た。

「秦君しばらく、久しぶりだな！」

と、聲をかけた。秦が見返すと、それは一高の一年のとき、寄宿舎の同室にゐた日置であつた。

「やあー」

と、秦も意外な邂逅に、つい微笑せずにはゐられなかつた。一高の一年の時丈は、わざと文科志望醫科志望法科志望の學生が、一室に割り當てられることになつてゐた。日置は、醫科志望だつた。

「君達が話してゐるところ、とてもよかつたんだよ。よく見ると、君だらうー つい、黙つて撮らして貰つたんだ……どうもすみませんでした。」

と、朱實の方へも、軽く會釋をした。秦は、苦笑しながら二人を紹介せずには居られなかつた。

二人とも、東大には入つたが、秦は文科だつたし、日置は醫科なので、馳けちがつて、一年に一度も會はない仲だつた。

それに彼は、學資を得るために、教授の著作の手傳ひをしたり、家庭教師をしたりしてゐるので、學校へ出る日が少かつた。

朱實の家の別荘に來てゐるのも、高等學校の入學準備をしてゐる朱實の弟の進の學習の相手をする爲であつた。

輕やかな歩調で先きに立つ朱實の後から、秦と日置は並んで降りた。

一高の一年時代、同室にゐたと云ふことは、割合に親しい關係のものであつた。

二人の間には一高時代の同室者の話、最近のお互ひの消息など、割合に話が多かつた。

秦には、日置が闖入者のやうな感じがしないではなかつたが、お互ひの友情のため、自制してゐた。

日置は、朱實の後姿を見つめながら、

「あのお嬢さん、君の何だい？」

少し訊き方が、ぞんざいなので、秦は一寸ムツとしたが、

「あの人の弟を教へてゐるんだ……」
と、何気なく答へた。

「さう！ とてもシヤンだねえ……」

と、日置は朱實に聞える位、無遠慮に云つてから、

「ねえ、今夜俺とここで、俺や弟達や親類の奴等の撮つた十六ミリのコンクールをやるんだが
あのお嬢さんと一しよに見に来ないかな……」

「うん……」

秦が、どちらともつかない返事をする時、日置は足を早めて朱實に追ひつくと、

「清水さん！」

と、馴々しく今教つたばかりの名前を呼んで、

「ねえ、今晚僕のとこで、十六ミリのコンクールをやるんですが、秦君と一しよに来て下さい
ませんか？」

と、云つた。

「……………」

朱實がだまつてゐると、

「ねえ、いゝでせう。先刻、無断で撮つた寫真も現像して置きます。」

と、云ひ添へた。

「えゝ。」

と、朱實が云ふと、

「ぢや、何うぞせひ、晩の御飯お濟みになつてから散歩がてらに、いらしつて下さい。僕の家
東郷橋のすぐ傍ですから……」

と、云ふと、朗かに、

「ぢや今夜……」

と、二人に軽く手を上げて、大跨に海岸を離れる道の方へ折れて行つた。

朱實は、そのガツシリした肩、男性的な肢體を見送りながら、

「日置さんつて……日置病院の日置さん？」

「さうです……」

「あんな息子さんゐるの……虎の門に、私より二級下のお嬢さんがゐたけれど！」

秦は、だまつてゐた。朱實が日置の事などすぐ忘れて、くれればいゝと思つてゐた。

「今夜いらつしやる！」

しばらく歩いてから、朱實が云つた。

「さあ！ 貴女は？」

と、秦が訊き返した。

「私行つて見たいわ。あんなあつかましい人ですもの、きつと面白いものを取つてゐるわ。」
口では、あつかましいと云ひながら、朱實が日置に興味を感じてゐるらしいのが、秦には嫌だつた。また、そんな事で、敏感に影響を受ける自分自身の氣持も、情なかつた。

二

日置の弟達や、親戚の青年達は、自分の撮つたフィルムの映寫される時には、自分で眞面目くさつたり、おどけたりしながら説明するのであつた。

暑いので、庭の芝生に出されてゐる椅子に腰かけた観客達は、その度に盛んな拍手を惜しまなかつた。観客は大部分少年少女達で、その母親や兄弟なども交じつてゐた。

日置の十位の小さな弟も、（これは僕が撮つたんだ）と、小さな胸を張つてスクリーンの下で辯士口調で説明した。

「次ぎは、眞一兄さんの逆立ちの光景！」

と、云ふと日置がスポーツシャツと、トレーニングパンツとで、海岸の砂原へ出て来て、先づ胸を叩いて大見得を切り、それから両手を砂について逆立ちをする光景が映し出された。

「ところが忽ち墜落とござい！」

と、云つたが、なるほど両手をついてパツと兩足で地を蹴つたかと思ふと、まだ逆立ちの姿勢にならない前に、ガツクリ両手が曲つて、顔を砂の中にうづめて倒れたのであつた。

観客は顔をしかめて、ベツ／＼と口には入つた砂を唾と一しよに吐き出してゐる眞一の大寫しを見ると、心の底から笑ひこけた。

中には、それ迄つゝまじやかにしてゐたお嬢さん達が、笑ひを制し切れずお腹をかゝへて、眼に涙をためて、その場をはづすものもゐた。

朱實も、思はず笑ひこけると、横で見つてゐた日置が、

「ひどい所を寫しやがつた！」

と、呟いて彼も笑つてゐた。

が、彼はスクリーンの中の彼の行動が、これほど朱實を笑はし、彼に親しみを持たせる事に役立ったことを見て取つて、満足してゐた。

溢々出て来た秦さへ、朱實と弟の進の間で、微笑してゐた。その次ぎは、日置の順番であつた。

彼の撮つたものだから、スポーツか何かだらうと秦は思つてゐたのだが、それは一般人には珍らしい種々な醫療器械や、手術の場面や、動物試験などを、いろ／＼な角度から撮つたもので十六ミリではありながら、學術的なものだつた。

カメラ・アングルもカメラ・ウオークも、なか／＼氣の利いたもので、畫面も美しく、人々は説明ヌキで、二三十分間この映畫に、見とれてゐた。

電燈が點くと、朱實は思はず心から、

「すばらしいわ。立派な文化映畫だわ。」

と、呟いた。そして、晝間あんなに、あつかましく見えた青年のどこに、こんな眞面目な研究的才能があるのかと、感嘆の眼で日置を見返した。

が、彼はさり氣なく、

「さう／＼お晝の寫眞現像するのを忘れてみましたよ。今、しますから、見にいらつしやいませんか。」

と、云つた。

押しつけるやうな、その底に愛撫するやうなものを持つてゐる日置の言葉は、朱實にとっていくらか命令的なものだつた。

映畫に上氣してゐる顔で、朱實はうなづいた。

「秦君も行かない？」

立上がりながら、秦を誘つたが、秦は日置の言葉にかゝると動く朱實に対する反撥で、つゝ氣輕に立てなかつた。

丁度次ぎの映畫が始まつたので、

「僕は、見てゐる。」

と、斷つた。

が、朱實を日置と二人ぎりにする不安で、忽ち憂鬱になつた。そして、氣がるに従って行か